

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

B
W
I
U
N
I
W
A
A

瀬波



2024
第11号



犬山祭 夜車山

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第11号

niwara

瀬波

目次

令和5年度活動記録

- 青塚古墳史跡公園……………1
- 木之下城伝承館・堀部邸……………2
- 歴史の里・しだみ古墳群……………3
- その他ニワ里ねっと自主事業……………4
- その他文化遺産関連受託事業……………5
- 活動年表……………6

研究論考

- 東海としての銅鐸記憶遺産
赤塚 次郎…………… 8
- 一志君の基礎的研究
和氣 清章…………… 18

コラム

- 母なる山「恵那山」と志段味古墳群
服部 哲也…………… 28
- 絵葉書から見る昭和初期の入鹿池
望月 友恵…………… 30

活動報告

- 3Dデータを用いた博物館教育の可能性
～2023年度青塚子ども教室「いつでもどこでも古墳はかせ！」活動報告～
早川 紘布…………… 32

資料目録

- 入鹿切れ文献目録
近藤 健一…………… 45

- 会員募集…………… 46

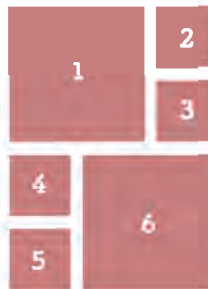
■ 表紙・裏表紙写真 / 中野耕司



青塚古墳史跡公園

活用・管理業務を犬山市より委託を受け実施。楽田地区をテーマにした企画展では、展示内容に会員さんによる新たな調査成果も盛り込みました。子ども向けワークショップでは、大学とコラボして開催。2年ぶりに上演した「古代音楽絵巻」は多くの方に好評をいただきました。見守る会と協働で古墳まつり、古墳草刈り活動も継続して実施しました。

- 1. 草刈りボランティア活動
- 2. あおつか子ども教室「いつでもどこでも古墳はかせ!」
- 3. 小学校の青塚古墳見学
- 4. あおつか歴史講座「歴史のタイムカプセル「楽田」を探る」
- 5. 青塚古墳まつり
- 6. 瀬波史楽座「青塚古代音楽絵巻 第7章」



木之下城伝承館・堀部邸

犬山祭の車山をテーマにした写真展「中野耕司・犬山祭車山写真展」を秋に開催。「猪之子座」では毎年恒例となっている落語や講談、音楽コンサートで賑わいました。赤塚理事長の私塾「月津塾」も年4回開催し、様々な地域の文化遺産について学びました。

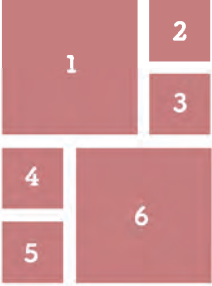
1. 猪之子座「上方講談をたっぷり！」
2. 「鏡チョコレート」を作ろう
3. 猪之子座「上方落語 九雀亭」
4. 猪之子座「美しき日本の音楽コンサート」
5. 企画展「中野耕司・犬山祭車山写真展」
6. 月津塾「乾山の神と二つの城下町」



歴史の里・しだみ古墳群

「夜の音楽会 in しだみ古墳群」はあいにくの雨でしたが、館内にて国際色豊かなステージを上演しました。しだみゅー古墳散策は、庄内川流域などを散策。歴史講演会には各方面から講師をお迎えし、どの回もたくさんの方にご来場いただきました。

1.夜の音楽会 in しだみ古墳群 2.「子ども研究員養成講座」 3.歴史講座「お庭に埴輪プロジェクト」 4.しだみゅー講演会「東谷山古墳群の時代と須恵器研究」 5.しだみゅー寄席「古墳 de 上方落語 九雀亭4」 6.古墳散策「東谷山の散策」



その他 ニワ里ねっと自主事業

今年度は石上げ祭に参加。会員さんとともに暑い中山頂まで石を担ぎ上げました。バスツアーは伊勢へ、現地発着の旅では京都を訪ねました。ウォーキングは各務原周辺の古墳を見学しました。犬山市羽黒の興禅寺を会場に、入鹿切れの防災講演会も開催し、地元の方を中心にご参加いただきました。

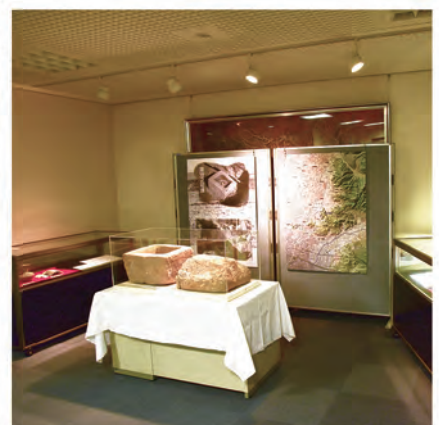
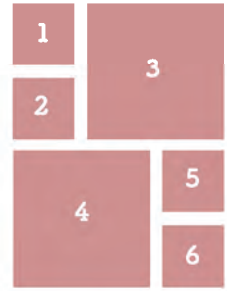
1.石上げ祭ニワ里連 2.散策「新加納・那加手力・琴塚を歩く」 3.バスツアー「伊勢国、銅鐸のたび」 4.サイクリング「清須の昔の街道をめぐる」 5.楽田小学校出前授業「楽田城の痕跡を探そう！」 6.ニワ里カレッジ番外編「入鹿切れを学び、防災に生かす」



その他 文化遺産関連受託事業

犬山市をはじめ複数の自治体・団体から委託を受け文化遺産関連事業を実施。犬山市では東之宮古墳にて冬至の日の出見学会を開催。雪被る古墳から日の出を拝むことができました。名古屋経済大学では犬山の蓮池古墳群に関する展示と講演会を担当しました。尾張旭市では企画展を担当、三郷駅をテーマにした展示などを行いました。

1.【尾張旭市】企画展「街を見てきた三郷駅」 2.【清須市】「桂九雀落語会と朝日遺跡トークライブ」 3.【岩倉市】下田南遺跡調査成果報告会 4.【犬山市】冬至の日の出見学 5.【春日井市】ハニワまつり「古代劇」 6.【名古屋経済大】企画展「蓮池古墳群」



11月

3日：【犬山市】東之宮古墳修復プロジェクト

①赤塚次郎②東之宮古墳③10名

5日：月津塾「史跡たび許之國事前学習会」

①赤塚次郎②堀部邸③9名

5日：【名古屋市】SHIDAMU 秋まつり

②しだみゅー③2424名

7日～26日：あいち考古学フェア「ポスターセッション」参加

①名古屋大学との共同②名古屋都市センター11階

7日：【名古屋経済大】犬山学サロン「蓮池古墳について」

①服部哲也②名古屋経済大学図書館

10日：史跡電車たび「許之國を旅する」

①和氣清章・赤塚次郎②京都宇治周辺③9名

11日：【犬山市文化財保存活用地域計画プラットフォーム】第1回会議・設立総会参加

②名古屋経済大学

12日：あつまれいぬやまっこ「古墳消しゴムワークショップ」

①服部哲也②犬山市南部公民館③80人

15日：丹羽の里座学会「愛智神話入門～天孫尾羽張氏牧家口伝」

①在野一生②堀部邸

18日：ニワリカレッジ「美濃地域の終末期古墳における前庭部」弥生人の居住立地の移り変わり

①若山鈴奈、秋松大允②青塚古墳ガイダンス③16名

19日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「森將軍塚古墳とシナノ」

①矢島宏雄②しだみゅー③86名

26日：猪之子座「美しき日本の音楽コンサート」

①長江希代子ほか②堀部邸③40名

29日～令和6年3月24日：【犬山市】企画展「地域に眠る文化遺産 in 楽田」

②青塚古墳ガイダンス

12月

3日：ニワリカレッジ「平安時代の色紙について」「中世猿投窯の山茶碗と特殊品」

①西澤彩音、寺井崇浩②青塚古墳ガイダンス③10名

9日：【名古屋市】しだみゅー寄席「古墳でりりん 歴史&棋士講談」

①旭堂鱗林・桂竹千代・旭堂左燕②しだみゅー③99名

10日：ニワリカレッジ「織豊期城郭の軒平瓦と瓦工人について」「近世鉢の江戸遺跡における需要の変化」

①鈴木悠介、早川紘布②青塚古墳ガイダンス③18名

17日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「古墳時代のよろいとアジアのよろい・世界のよろい」

①川畑純②しだみゅー③59名

12月23日：【犬山市】「冬至の日の出見学」「土あげ祭」

①赤塚次郎②東之宮古墳③21名 ※「土あげ祭」は荒天中止

1月

14日：【岩倉市】下田南遺跡調査成果報告会「古代官衙遺跡と五条川」

①平松久和・梶原義実・永井邦仁・赤塚次郎②アデリア総合体育文化センター③250名

21日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「美濃地域の群集墳」

①森島一貴②しだみゅー③78名

27日：【犬山市】あおつか歴史講座「楽田地区の文化遺産の活用について」

①服部哲也②青塚古墳ガイダンス③24名

28日・2月4日・3月3日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト

①陶磁美術館と共催②しだみゅー③各24名

2月

2日：青塚古墳消防訓練

②青塚古墳ガイダンス

3日：【養老町】象鼻山キノコワークショップ「植菌」

①津田格②ふれあいセンター養老町③8組22人

3日・10日：青塚古墳を見守る会「古墳草刈りボランティア」

②青塚古墳③29名・28名

11日：【犬山市】あおつか歴史講座「歴史のタイムカプセル「楽田」を探る」

①松山末広②青塚古墳③42名

11日：【東之宮古墳出土人物禽獣文鏡】チョコレートワークショップ

①浅見たか子②堀部邸③15名

14日：楽田小学校出前授業「上街道散策」

①服部哲也・望月友恵②楽田小学校周辺③4年生3クラス

17日：【清須市】芸術劇場「桂九雀落語と朝日遺跡トークライブ」

①桂九雀・赤塚次郎・原田幹②清須市民センター・ホール③290名

18日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「乙塚古墳と東美濃地域」

①澤井計宏②しだみゅー③83名

21日：丹羽の里座学会「ことばにみる尾張と丹後」

①伊藤宏樹②堀部邸

23日～令和7年1月31日：【尾張旭市】企画展「田島清の風俗画にみる四季の暮らし」

②スカイワードあさひ

24日：【四日市市】くるべ講演会「文化遺産のみえるまちづくりをしよう」

①服部哲也②四日市地域総合会館③30名

29日：ニワリバスツアー「伊勢国、銅鐸のたび」

①和氣清章・赤塚次郎②津市、鈴鹿市③21名

3月

9日：【犬山市】あおつか歴史講座「神宮寺跡について」

①兼松泰弘②青塚古墳ガイダンス③45名

10日：【名古屋市】しだみゅー歴史セミナー「尾張連草香の園」

①丸山裕美子、内記理、早野浩二、赤塚次郎②愛知県立大学長久手キャンパス③215名

16日：【犬山市】あおつか歴史散策「神宮寺跡と小路遺跡を尋ねて」

①服部哲也・兼松泰弘②犬山市楽田地区③37名

17日：【名古屋市】しだみゅー講演会「東谷山古墳群の時代と須恵器研究」

①中里信之、岩越陽平、藤野一之、早野浩二、東海古墳時代研究会との共催②しだみゅー③83名

19日～5月26日：ミニ企画展「青塚古墳近くの自然」写真展

①田村裕三②青塚古墳ガイダンス

20日：【犬山市】東之宮古墳啓発事業「土あげ祭」

①赤塚次郎②東之宮古墳③予備日ともに雨天中止

■そのほかの事業

文化遺産カードの制作発行

愛知県名古屋市・日進市・豊田市、福井県小浜市・美浜町、岐阜県富加町・美濃加茂市・大垣市、滋賀県東近江市、長野県上田市、信濃川火焼街道連携協議会

4月：【尾張旭市】「陶製狛犬絵葉書」作成。

5月 研究紀要「遷波10号」発行

5月 遷波里 booklet006「乾山の神と二つの城下町」発行

6月 遷波里 booklet002「木之下城と織田街道」& 003「遷波四代の王墓」再発行

5月～3月（隔月）会員通信「さとの四季だより」74号～79号発行

■管理・運営施設の年間入館者数

【犬山市】青塚古墳史跡公園入館者数 14,087名

校外学習 22校（合計1266名 引率73名）

【犬山市】木之下城伝承館・堀部邸入館者数 5,507名

【名古屋市】体感！しだみ古墳群ミュージアム 入館者数 98,629名

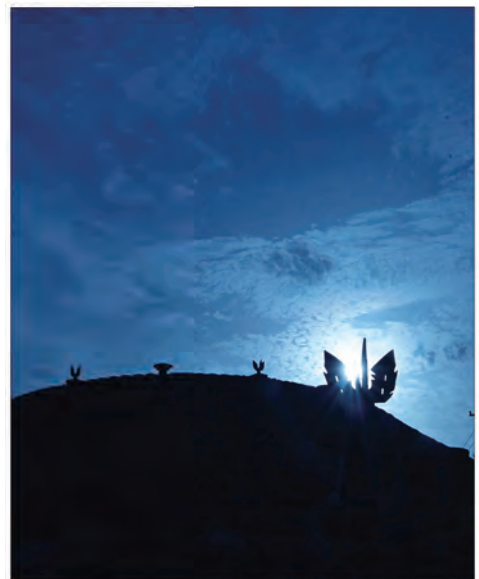
■ご寄付

寄付金（本年度総額） 672,882円

・タイム技研さま及び会員2名さま

・10から20万円の寄付（草刈り機等の備品購入に活用）

・青塚古墳及び堀部邸寄付金（自主事業等の経費に活用）



志段味大塚古墳

2023.4 ▶ 2024.3 令和5年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」

①講師名（敬称略） ②開催場所 ③参加者数

赤色：ニワ里ねっと自主事業・共催・協力事業

茶色：文化遺産関連受託事業

4月

16日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「S字甕誕生の時代と集落」

①赤塚次郎②しだみゅー③78名

19日：丹羽の里 座学会「史記を読む3春秋戦国時代」

①山田茂樹②堀部邸

22日～5月13日：青塚古墳を見守る会「青塚に鯉のぼり」

②青塚古墳

23日：ニワ里サイクリング「清須の昔の街道をめぐる」

①古川博昭②清須市周辺③10名

26日：池野小学校出前授業「学校周辺の古墳を知ろう」

①服部哲也・望月友恵②池野小学校

5月

3日：【名古屋市】SHIDAMU春まつり

②しだみゅー③2,658名

7日：月津塾「乾山の神と二つの城下町」

①赤塚次郎②堀部邸③25名

13日：青塚古墳まつり

②青塚古墳③約800名

13日～7月30日：ミニ企画展「青塚古墳近くの自然」写真展

①田村裕三②青塚古墳ガイド

17日：丹羽の里 座学会「ツカマと阿礼」

①赤塚次郎②堀部邸

20日：ニワ里ねっと総会

②堀部邸

21日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「庄内川流域の弥生・古墳時代集落」

①永井宏幸②しだみゅー③77名

27日：青塚古墳を見守る会「古墳草刈りボランティア」

②青塚古墳③32名

27日・28日：【名古屋市】しだみゅー闇夜体験「ナイトミュージアム」など

②しだみゅー③10組34名

6月

3日：【名古屋市】しだみゅー古墳散策「庄内川流域古墳と遺跡」

①服部哲也・永井宏幸②名古屋市市中村区散策③16名

10日：青塚古墳を見守る会「古墳草刈りボランティア」

②青塚古墳③30名

18日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「美濃の大集落～柿田」というムラ」

①長江真和②しだみゅー③77名

21日：丹羽の里 座学会「巾下水道についての紹介」

①伊藤宏樹②堀部邸

24日：ニワ里カレッジ番外編「入鹿切れを学び、防災に生かす」

①中野包裕・羽黒小図書ボランティアほか②興禅寺③87名

29日：楽田小学校出前授業「青塚古墳をもっと詳しく」

①服部哲也②楽田小学校③6年生3クラス

7月

1日：犬山市民大学・文化遺産学科「田中天神の森」

①赤塚次郎②フロイデ

2日：月津塾「風土記学サロン 丹後の酒神」

①赤塚次郎②堀部邸③20名

5日：【養老町】象鼻山キノコワークショップ「伏せ込み」

①津田格②養老小学校

8日：【名古屋市】しだみゅー一寄席「古墳de九雀亭 vol.5」

①落語 桂九雀・桂九寿玉、お囃子 高橋まき②しだみゅー③55名

9日：猪之子座「上方落語九雀亭8」

①落語 桂九雀・桂九寿玉、お囃子 高橋まき②堀部邸③18名

15日～9月3日：企画展「今日から君も、古墳はかせ！」

②青塚古墳ガイド

15日：犬山市民大学・文化遺産学科「山姥物語」

①服部哲也②フロイデ

16日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「3世紀としての文字を考える」

①和氣清章②しだみゅー③93名

19日：丹羽の里 座学会「倭国大乱と火明命東征」

①岡本利雄②堀部邸

23日：あおつか子ども教室「いつでもどこでも古墳はかせ！」

①早川紘布・名古屋大学との共催②青塚古墳ガイド③6組19名

26日・8月2日：【名古屋市】しだみゅー子ども研究員養成講座

①服部哲也②しだみゅー③各20名

29日：犬山市民大学・文化遺産学科「天に昇った二匹の馬」

①望月友恵②フロイデ

8月

8月1日～9月3日：ミニ企画展「青塚古墳を詠む」俳句展

①つれづれ句会との共催②青塚古墳ガイド

1日：あおつか子ども教室「いつでもどこでも古墳はかせ！」

①早川紘布・名古屋大学との共催②青塚古墳ガイド③4組8名

5日：【養老町】養老火打石ワークショップ

①服部哲也②養老町③7組20名

6日：石上げ祭参加

②尾張富士浅間神社③15名

11日：あおつか子ども教室「いつでもどこでも古墳はかせ！」

①早川紘布・名古屋大学との共催②青塚古墳ガイド③6組17名

20日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「人物埴輪のしぐさ」

①日置真穂②しだみゅー③72名

26日：【名古屋市】しだみゅー夜の音楽会「天空のテノール包金鐘コンサート」

①包金鐘ほか②しだみゅー③200名

9月

3日：月津塾「風土記学サロン 讃岐の悪魚」

①赤塚次郎②堀部邸③17名

8日：楽田小学校出前授業「楽田城の痕跡を探そう！」

①服部哲也②楽田小周辺③6年生3クラス

10日：【犬山市】犬山市防災訓練参加

②城東中学校

13日～10月31日：大縣神社事業「手作り埴輪展示」

①大縣神社②青塚古墳ガイド

16日：青塚古墳を見守る会「古墳草刈りボランティア」

②青塚古墳③33名

17日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「茅原大墓古墳と盾持人埴輪」

①福辻淳②しだみゅー③85名

20日：丹羽の里座学会「史記を読む4」秦本紀

①山田茂樹②堀部邸

23日：ニワ里ねっと散策「新加納・那加手力・琴塚を歩く」

①赤塚次郎②各務原市周辺③15名

30日：【春日井市】古墳消しゴムワークショップ

①早川紘布②春日井中央公民館

30日：青塚古墳墓前祭

①大縣神社②青塚古墳

10月

2日～11月30日：【名古屋経済大】企画展「犬山市蓮池古墳出土遺物」

②名古屋経済大学図書館1階ロビー

7日～令和6年9月30日：【尾張旭市】企画展「街を見てきた三郷駅」

②尾張旭市スカイワードあさひ

8日：ニワ里サイクリング「木曾川渡し舟の再チャレンジ」

①古川博昭②羽島市周辺③雨天中止

9日：猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり9」

①旭堂南海②堀部邸③21名

10日：美濃加茂市蜂屋小学校出前授業「講談で学ぶ郷土の歴史」

①旭堂南海②蜂屋小学校③6年生2クラス

14日～29日：企画展「中野耕司・犬山祭山写真展」

①中野耕司②堀部邸主屋2F

14日：【犬山市】東之宮古墳散策「古市場遺跡とその周辺」

①赤塚次郎②各務原市鶏沼③4名

14日：【名古屋市】しだみゅー古墳散策「乙塚古墳とその周辺」

①澤井計宏②土岐市③16名

15日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「志段味大塚古墳と大須二子山古墳のよらいとかぶと」

①初村武寛②しだみゅー③79名

18日：丹羽の里座学会「犬山の条里制」

①高橋幸子②堀部邸

21日：第15回瀬波史楽座「青塚古代音楽絵巻 第7章」

①はにわ娘歌姫隊・長江希代子・安井正規・劇団「夢舞台」・酒井麻利子・岩本有里子・中野包裕・包金鐘②青塚古墳③170名

28日：【春日井市】ハニワまつり「古代劇」

①はにわ娘歌姫隊・長江希代子・安井正規・劇団「夢舞台」・中野包裕・②春日井市二子山公園③まつり入場者4,500人

28日：【春日井市】ハニワまつり「古墳消しゴムワークショップ」

①服部哲也②春日井市二子山公園③100名

東海としての銅鐸記憶遺産

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

赤塚次郎

1. はじめに

伊勢湾周辺地域の銅鐸分布、ここでは伊勢・尾張・美濃・三河・遠江を中心に概観し、特に銅鐸埋納とその空間についてあらためて見直しておくことにしたい。出土した遺跡・場所からその特徴等が見えてくるようでもある。したがってここでは銅鐸の型式・編年的研究等に言及することはほとんどない。これらは、すでに多くの研究者が基準にしている難波洋三による詳細かつ緻密な分析結果とその成果に基づいており、これに準拠したい。また、幸いにも発掘調査に関与できた、愛知県埋蔵文化財センターの調査で発掘された銅鐸2点。つまり一宮市「八王子銅鐸」と清須市「朝日銅鐸」について、あらためて調査成果を再検討する形で、その「埋納」時の空間意識・景観を基準に考えてみることを主眼におく。東海という地域における「銅

2. 東海の銅鐸分布から見えてくるもの

伊勢湾を巡る銅鐸を総合的にまとめたものとしては、一宮市政80周年記念シンポジウム『銅鐸から描く弥生社会』一宮市博物館（久保2001）、またその記録集である『銅鐸から描く弥生時代』学生社（金関・佐原2002）がある。これらは八王子銅鐸の発見を契機にまとめられているが、その中で特に興味深い2点をまずは確認しておきたい。一つは「銅鐸はなぜ埋められたか」。核心に迫る重要問題である

が、もつとも困難な視点でもあり残念ながら明快に紐解くに至っていない。井上洋一がまとめているように、かつてはムラ境、非日常的な特別な場所を選定して破棄・悪きものへの対応など、さまざまな見解が提示されてきた（井上2002）。寺澤薫は銅鐸祭祀という米作りに伴う神と人々の関係からその終焉を「埋納」と理解し、「邪悪なるモノを遮断し、地霊を奮い立たせ、豊穡の生命を取り戻そうとした」、またこれらを執り行う人物を祭りの主宰から共同体の首長へ変化していくと言及（寺澤2002）。さらに「大地への同化の見返りとして集団や領域の日常生活の不変の継続と安定、そして繁栄とを交換するものである」としてやがてこうした呪器から政治的な共同体祭祀の道具へと拡大していったと論を展開した（寺澤2010）。なるほど従来の個別的な現象を踏まえての解釈では見えて

こない壮大な物語と思われる。因みに埋納時期を大きく2つの時期（弥生中期末と終末期）にまとまるという考え方がかつては支配的であったが、一方で「多段階埋納」を前提として段階的・地域的な偏差が大きいのではないかという指摘（森岡2019）が増えてきている、前者を社会・環境変動と結びつける考え方も興味深い。すべて一律な解釈が成り立つようではなく、銅鐸の集中埋納を含めその時点での各地域社会の「意思」を「反映」したものであるという視点に、まずは共感して進めたい。

二つ目は「三遠式銅鐸の位置付け」。難波洋三は扁平鈕式古段階まではその多くを畿内からの搬入品とし、新段階で一時的に流入が途絶え、これを契機に東海派・三遠式銅鐸へとその製作志向が確立していったと考えた（難波2001）。その後、特定の銅鐸群のみが分布する地



域として特筆する場所であると興味深い指摘を行う。さらに東海派銅鐸の製作集団は東奈良遺跡を拠点として活動していた技術者集団に系譜を持つとされた。東海派は「外縁付鈕2式の摂津系の工人集団の系譜を引く」と指摘する(難波2011a)。そしておそくとも突線鈕1式初頭には東海へ移り、瀬戸内東部に拠点を置く横帯分割型の関与により三遠式銅鐸が生み出された(難波2011b)と位置付けた。

進藤武は分布が三遠式銅鐸は一見近畿式銅鐸と重複しているように見えるが、近接していても同じ場所に埋納というより、別途に埋納され渥美半島など分布が偏り、異なった取り扱いがなされていると指摘した(進藤2004)。

以上の先行研究を踏まえ銅鐸分布の視点から、ここでは銅鐸がどのような「経路」で地域社会にもたらされたのか、という「路」をまずは推定してみたい。そのキーワードを埋納場所・空間と周辺の遺跡を踏まえてた、歴史遺産が分布する漠然とした経路でもある「文化路」を特に意識してみたい。

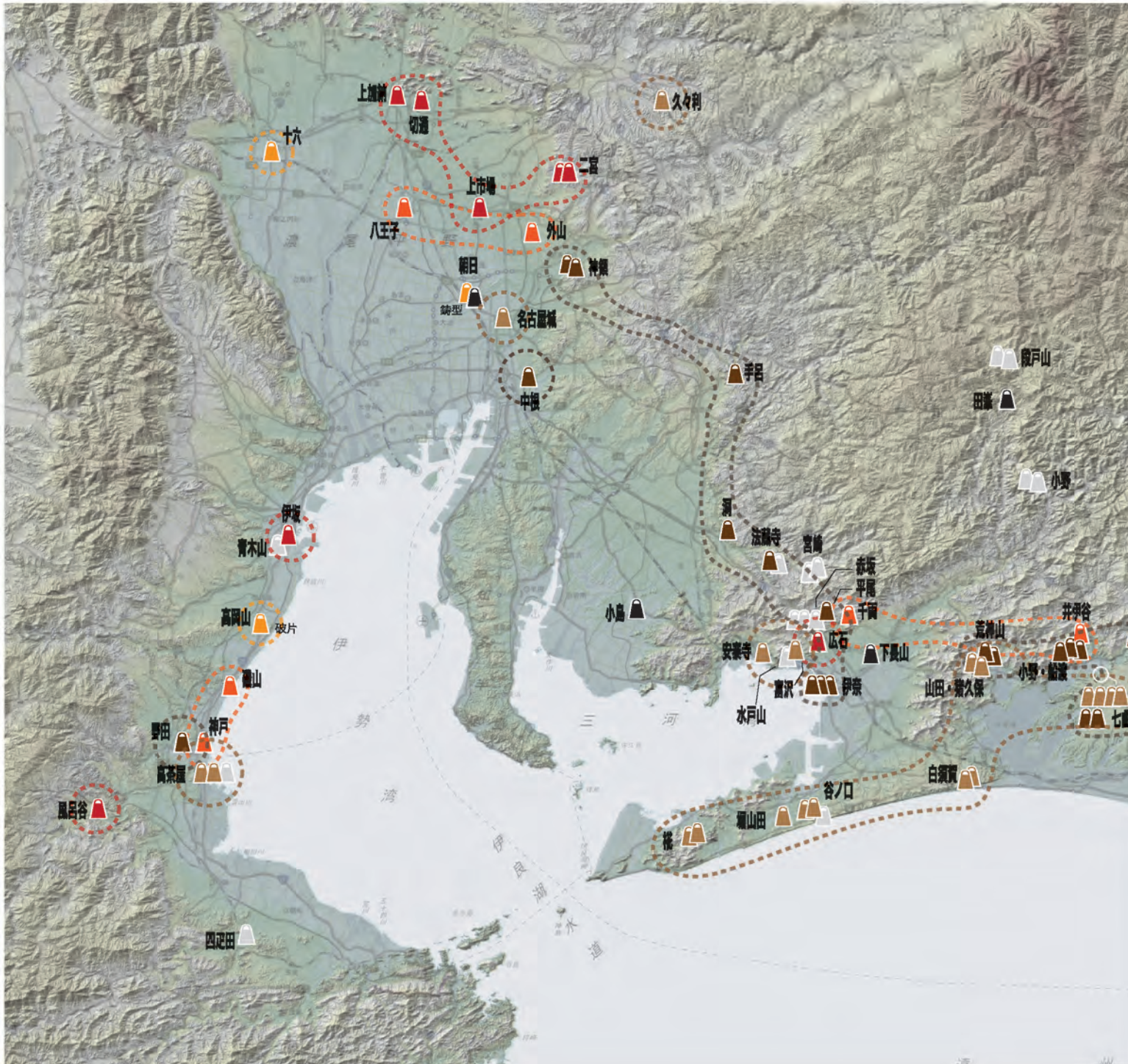


図1 東海地域の銅鐸 (地図は電子国土webを基に作成)

2.1. 扁平鈕式銅鐸までの分布偏差

さて、現在までの先行研究においてまとめられている東海地域の銅鐸出土地（発見場所など）を難波洋三による分類を基本に分布図を作成してみた（図1）。周辺の遺跡（歴史遺産分布）を踏まえての文化路を意識したエリア図にしたが、異論も考えられるので、一つの目安として見ていただければ幸いである。大きくみれば、すでに指摘されているように、東海へは西から東へ徐々に新しい銅鐸群の分布が広がっていく様子が見て取れる。これに難波が指摘した扁平鈕式前後に着目すれば、明らかに大きな分布偏差が容易に推定できる。もちろん現状での分布論の限界は棚上げしてであるが、まず第一に扁平鈕式までの銅鐸分布はほぼ3つにまとまる傾向があると見て良い。

一つは伊勢雲出川流域を含めた、中勢沿岸部地域。不確定な資料を棚上げすれば（注1）、この地域より以南に銅鐸分布は主体的ではなく、雲出川流域、ここに一つの何らかの「境界」が意識されていたと理解したい。次に濃尾平野北部域、この地

域は河川が複雑に流れ扇状地・平野部に銅鐸分布が見られる。しかし犬山の二宮銅鐸を除けば、おおむね扇状地端部から湿地帯を控えた特定の分布域にほぼ限定できる。なお二宮銅鐸は明らかに現在の本宮山を意識したものであり、本宮山の特徴的な神奈備型景観は「邇波」のエリアではなく「山田」領域からの景観にある。すなわち銅鐸分布域から犬山扇状地（邇波）は外れる。三つ目は宝飯郡、豊川水系右岸、後の姫街道沿いのエリアが強く意識されているように思われる。なおそこには本坂峠越えをひかえた「石巻山」という興味深い山の存在は留意したい点である。

以上の三つのエリアを除くと、この時期、東海地域にはほとんど銅鐸が発見されていない。これをどのようにに理解するかであるが、見つからない銅鐸の存在を推定することも可能であるが、伝銅鐸地を含めても以上の分布域を大きく逸脱する資料・分布は現状では確認できていない。したがって弥生時代中期における銅鐸祭祀は、東海地域では3つのエリアにおいて、主体的に行われた事をそのまま反映していると推定し

ておきたい。

「雲出川を境界とする中勢沿岸部地域」「犬山扇状地を除く濃尾平野北部域」「宝飯郡、豊川水系右岸」の三地域。したがって後の「大野郡など西濃北部とタギ・味蜂間郡から葉栗・中島・海部郡の零メートルを中心とする低地帯」「邇波郡域から木曾中流域」「知多」「御河（矢作川流域の西三河）」「豊川左岸（八名郡）」「遠江」（注2）、そして雲出川以南の「南勢地域」は、この時期エリア外となる。ここから見えてくる銅鐸分布の風景は、本来極めて偏在的でもあり、「銅鐸祭祀」行為と弥生文化を常に一律に共有させて考える事は避けるべきかもしれない。

2.2. 三遠式銅鐸の分布と2つの場面

次に突線鈕式に入ると、様相が一変する。すなわち分布エリアが著しく偏在し、伊勢北部域を含めた濃尾平野からほぼ銅鐸の音色が一斉に消え、今まではほとんど銅鐸が見られない遠江・渥美半島に分布が極端に偏ることになる。これをどのようにに評価するか興味深いところである。近畿式銅鐸の破片が朝日遺跡など伊勢湾沿岸部などからも出土している。これを廻間I式期に近畿式銅鐸が一斉に破棄され、他地域でも指摘されて

古墳時代後期に顕在化する、尾張から三河への基幹路と重なる（赤塚2024）。そして現状では銅鐸が見つからない豊川左岸（八名郡）を挟んで姫街道エリアを基軸に遠江地域に分布が広がる。引佐郡を基軸とする路がやはり注目したいエリアであろう。

一方で近畿式銅鐸は、進藤が指摘しているように、三遠式銅鐸とは場面を微妙にずらしながら、渥美郡を中心に広がりを見せると理解して

良いだろう（進藤2004）。引佐郡の一部と宝飯郡南部へと分布が広がるが、前述した姫街道筋を大きくズれることは見られない。まとめると、三遠式と近畿式銅鐸は分布域をずらし、引佐を除き棲み分け的な位置付けを見せているといえよう。ここでさらに注目したいのが、弥生中期での先ほどの東海3地域のうち中勢と宝飯郡。特に宝飯郡は外縁付から三遠式・近畿式銅鐸まで銅鐸が集積しており、濃尾平野北部域とはまるで異なる動きが見える。また中勢ではしだいに雲出川左岸流域に収斂されていくような分布の動きが見られ、後のアザカ國北部域と宝飯郡（穂國）が銅鐸祭祀をリードしていた可

能性が高い。特に宝飯郡は難波が指摘しているように「東海派銅鐸」が朝日銅鐸からC段階に小島・下長山と三河へ製作集団が動いた可能性（難波2005・2011）、また同じく三遠式銅鐸伊奈型の動向を踏まえれば、あるいは宝飯郡内での三遠式銅鐸の誕生とその製作を指導していく集団の存在が推測できるかもしれない。土器様式としては寄道式土器様式圏に三遠式銅鐸の中核集団を予見することが可能である。

一方でその頃、濃尾平野では銅鐸祭祀そのものが消失しており、その東外縁地域（庄内川中下流域・アユチ）において三遠式・近畿式が点在する。低地部ではなく台地・高台部であり、濃尾平野低地部とは異なる土器様式を持つアユチ郡は、最後まで（おそらく廻間I式前半）銅鐸を使用した地域集団の存在が類推できよう。

なお伊勢では複数の銅鐸が埋納された高茶屋銅鐸群に収斂されていくような動きが見えてくる。高茶屋I号銅鐸は近畿式の範疇ではあるが突線や裾部のデザイン等に三遠式の影響が色濃く、また外向する鋸歯文デザインなど（中村2000）突線

鈕2式段階での技術者間の動向を表す興味深い資料である。また伊勢で唯一の三遠式銅鐸である野田銅鐸（三遠4式）の存在は、近畿式・三遠式生産の最後の拠点の一つが、雲出川下流域に存在した可能性も推測でき、渥美半島へのルートに南勢を迂回し、直接ハズの海への海上路が見えてくる。それはその後の一志郡（アザカ）を起点に尾張・三河への土器の動きとつながっていく。また近畿式銅鐸の製作に近江南部がかかわっているという難波の指摘を踏まえると、その後の土器の動きと連動するかに見える。

2.3. 穂國祭祀・宝飯郡

さてここでこうした銅鐸分布において最も興味深い「宝飯郡」について見ておこう。銅鐸が集中的に見つかっている場面は明らかに豊川右岸、かつ丘陵部に近い谷間の場面が多い（図2）。その中で最も古いものが千両銅鐸（外縁付鈕2）で次に広石銅鐸（扁平鈕古）、そしてこの地域でも画期となるであろう銅鐸、下長山銅鐸（東海派）が丘陵部ではなく豊川右岸の段丘面に存在する点は大変面白い。続いて三遠式

銅鐸である平尾銅鐸（突線式3）が千両銅鐸周辺に、近畿式銅鐸である富沢銅鐸（突線式3）が広石銅鐸周辺に存在していくことになり、前者は山麓域、後者は御津神社から三河湾という志向性が見られ、まったく異なる点が興味深い。また両者周辺では銅鐸出土伝承がそのほかにいくつか見られるので、さらに分布がまとまる傾向がある。加藤安信（加藤2001）は下長山遺跡と後者の長床遺跡という中核的な集落遺跡の存在を指摘する。そして最後に3口の銅鐸が発見された伊奈銅鐸（突線式3）が豊川河口部に埋納された。現状では豊川左岸には銅鐸分布が見られない、そして右岸の丘陵部界限には伝承地域を含め2つの集中する銅鐸出土地が存在する。

三遠式銅鐸は東海派をベースに誕生することが難波により指摘されており、東海派Dである下長山銅鐸が後述するように銅鐸出土地と下長山遺跡、そして特徴的な霊山「石巻山」が冬至軸に存在する方位にあり、地域空間を強く意識した場面設定と考えたい。特定の山を「聖域化する文化」、天体の動きを意識する文化（北條2023）が仕込まれ

澤2010)は、埋納状況を分析しその方法において「特に丁寧に取り扱ったと思えるような施設を設けることは一般的であったとは考えがた」とし、埋納箇所を示すための標識は大部分の埋納地点で認められないと言及した。一方で銅鐸地点付近の立石・大岩・露岩の存在を指摘している。しかしその因果関係については含みを残しつつ保留する。ここでは別の視点から次の二つの遺跡での発掘事例を中心にして、「標識」なる何らかの表示・その記憶の存在について、あえて考えてみたい。愛知県一宮市「八王子遺跡」と清須市「朝日遺跡」の事例である。

3.1. 八王子銅鐸・250年意識

樋上昇による調査報告書において詳細な状況が報告され、その評価も公開されている(樋上2002)。それによればその要点は以下のよう整理できる。

①八王子銅鐸は中期前半(貝田町式)の居住域、内環濠付近に不整形の円形土坑の中に、鱈方位E124°Nで倒立状態で埋納。②埋納土坑上には中期末高蔵式の土器包含層が堆積、その最上部には高蔵

式方形周溝墓SZ05の土器廃棄層SX04が存在する。③高蔵式期には方形周溝墓を主体とする「墓域」が形成。④埋納時期は貝田町式の末から高蔵式の初頭段階と推定。この段階は朝日・貝田町式期の環濠・居住域が廃絶し、高蔵式期の方形周溝墓群が造営されるその間と想定した。結果として八王子銅鐸、外縁鈕1式の銅鐸を含めた「聞く銅鐸」の埋納が、中期末で一斉に埋納されていくという考え方に大きな波紋を投げかけた重要な発見となった。

さて、ここでは貝田町式末段階(3期新)に埋納された(遅くても高蔵式1期)であろう八王子銅鐸の埋納場所を再度検討してみたい。注目したいのは、まず八王子遺跡の集落動向である。埋納後にその空間は「墓域」として活用された。そしてその後は居住・墓域という主要な集落空間から離脱し、一般的な居住域ではない不思議な空間として蘇る。後期の八王子古宮式・山中式期を経て、廻間1式期初頭段階にほぼ一過性の特殊な施設が構築された(赤塚2002)。この主要な遺構配置と八王子銅鐸が埋納される前後の遺

構配置を重ねてみると、大変興味深いことが見えてくる(図3)。すなわち、廻間1式期初頭段階における遺構配置の中で八王子銅鐸が埋納された地点は、長方形区画の南西側の区画端、かつ廻間1式期の大量

の土器廃棄が存在するSK73・SK01と内側区画との間に位置する。さらにその南側には「井泉」SX05が存在し、祭祀空間のど真ん中に存在する。これは偶然の結果ではなく、銅鐸埋納地が意識され

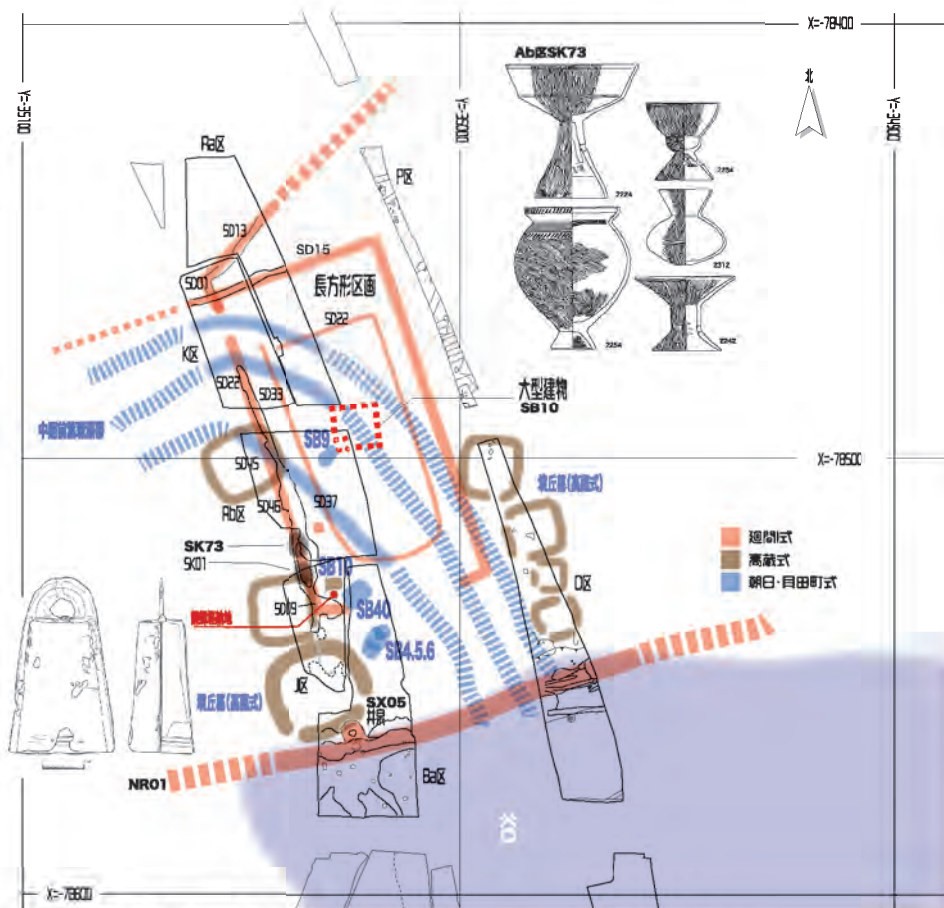
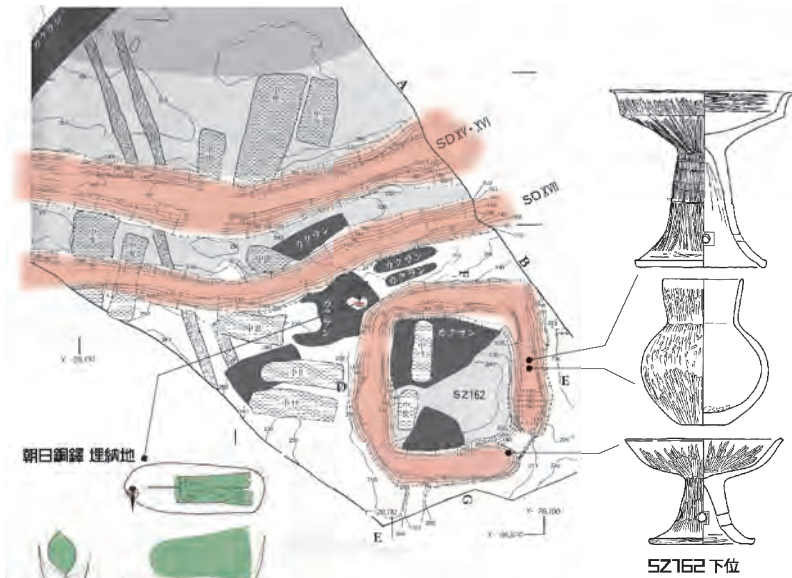


図3 八王子遺跡 長方形区画と八王子銅鐸(樋上2002 加筆修正)

その場面を含めた祭祀デザインが構想されていたことを示しているのではないのか。埋納時期である貝田町式3期新から廻間I式1段階まで250年以上の隔りがある。銅鐸埋納地に何らかの表示、標識があり、部族社会における位置付けとして、この場所が強く意識され続けていた(記憶遺産)可能性が考えられた。



この視点に立てば、高蔵式期での方形周溝墓の造営は、銅鐸埋納地を強く意識しつつその特定の場所に寄り添い、空間として捉え直し墓域形成を行なっていたとも考えられる。すると近接するSB10は銅鐸埋納地にまつわる特殊な竪穴建物の可能性すら考えられる。南側のSZ06北溝から石製「舌」

が見つかっているが、これも示唆的でもある。八王子銅鐸埋納空間は彼らの意識の中で、記憶遺産として語り継がれてきた可能性が高い。埋納への強い意識はムラの歴史の出来事と機をいつにするであろう。そしてそこに2世紀前葉の特別な場面

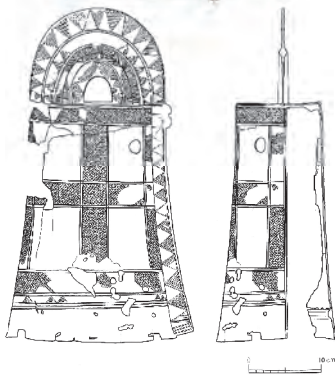


図4 朝日遺跡SZ162と朝日銅鐸 (石黒1991 加筆修正)

外環濠ともに大きく北側に屈曲する。③埋納土坑は廻間式土器により堆積。こうしたことから朝日銅鐸は廻間式期内に埋納され可能性を推測した。しかし南環濠との関係では、まず銅鐸埋納が行われその後に「環濠」掘削。まさに銅鐸埋納地を避けるように環濠が設定さ

3.2 朝日銅鐸・新しいムラのデザイン

次に朝日遺跡について見てみよう。東海派Bの朝日銅鐸について報告書等の内容(石黒1991)をまとめてみると以下のように整理できる(図4)。

①朝日銅鐸は後期南環濠、外環濠と後期方形周溝墓SZ162との空間に、土坑内には鑿を立て鈕を東側にした明確な東西軸でおかれていた。②環濠は、銅鐸埋納地内・

が重複してデザインされた。廻間I式1段階の祭場としての長方形区画である。もちろん長方形区画設定と銅鐸埋納記憶とは直接繋がる現象ではなく、この地に沈殿した強い記憶遺産を利用した、新たな2世紀前葉での物語の創設であろう。

れた可能性を指摘し、朝日遺跡における環濠と方形周溝墓の配置において、溝に重複させる例が一般的であるが、方形周溝墓(SZ162の溝)を避けるような事例は見当たらない。したがって「銅鐸を避け」環濠・周溝墓が配置された可能性も考えられると言及している(石黒1991)。この石黒の見解を基本にして以下、ここでもう少し細かく土器や遺構配置を見ておこう。

まずその南に存在するSZ162はどうだろうか。出土した遺物は下層(下位)資料が山中I式1段階が中心であり、ほぼ南環濠の推定掘削時期と大きく重複する。各調査区の南環濠出土遺物からは八王子古宮式から山中I式1段階の間に環濠の設定時期が推測できる。環濠に近接する方形周溝墓群の中には明らかに八王子古宮式の造営(SZ123古宮II式)されたものを含む。つまり南区画を廻る環濠の掘削時期とそれを取り巻く方形周溝墓群の造営開始時期はほぼ同じ様式内、すなわち八王子古宮式新段階(古宮II式)に存在する。したがって環濠が機能した時期は、八王子古宮式から山中I式・II式期の

西暦1世紀を中心とする営みが見えてくる。銅鐸埋納地周辺の環濠帯・SZ162はほぼ同じ時期にムラの南側地区に設営された特定空間のデザインであった可能性を推定しておきたい。それはまぎれもなく銅鐸埋納という場面設定もそのデザインのの中に含まれていた。次にSZ162の特異性についてまとめよう。第一に軸線が東西南北と整然と設営されており(朝日遺跡内では極例外的)、かつ地点が南環濠の南入り口付近で他にこの時期の墳墓は造営されていない。唯一の遺構である。どうやら他の八王子古宮式・山中式期の墳墓に比べ特別な状況を呈すると考えても良い。そもそもこの場所は、中期の大環濠においても南側の入り口に相当し、期末の高蔵式期の墓域がここから南側に大きく展開する。言ってみれば集落の境界。SZ162北溝・銅鐸埋納・屈曲部西の外環濠はすべて一直線の東西軸に設計されており、かつその東側延長部が集落の入り口となる。これは偶然ではなく一体としてのムラのデザインそのものといえよう。以上を総合すると以下のよう

に結論づけられる。朝日銅鐸の埋納

時期を八王子古宮Ⅱ式とし、同様式内に南区間南部の集落デザインとして南環濠・SZ162が設定された。高蔵式新段階T-SA層が40BC-20ADの間(赤塚2009)とすると、遅くとも1世紀中頃を中心とした埋納時期を想定し、朝日遺跡の弥生後期集落の復興が完了した。

朝日銅鐸の埋納地点はそうした地点を設定し、中期末高蔵式新段階に勃発した大洪水(T-SA層)による集落への被災を契機に、再び復興へ向いこの事業がほぼ完了した時点でもある。こうした時期に朝日銅鐸が埋納され、この場所を起点として南環濠が設定されていったと考えられよう。したがって銅鐸埋納地とその空間を強く意識し、環濠そのものの複雑に屈折を繰り返して造営された。そしてほぼ同時にSZ162がやはり寄り添うように造営された。墳墓とすればここに眠る人物はいかなるものであるうか。因みに同じように墳墓と環濠が屈折を繰り返す場面は、同じ朝日遺跡の北環濠(区画)のSZ377・SZ376などが見られ、この場面は突出する

環濠を意識した造営である。またSZ377(山中Ⅰ式後半)は異常に完形土器が多量に出土し、このような多量の土器が含まれるものは朝日遺跡において数例しか存在しない。やはり特異なイメージを残す。環濠に接し、多量の遺物群を包含する方形周溝墓(SZ162・SZ377及びSZ133)の評価、その造営意図を視野に入れて再検討する必要がある。

以上、朝日銅鐸も何らかの表示・標識が強く意識され、この場所がある種特別な空間として長らく、彼らの中に記憶遺産を意識する場として位置付けられていた可能性を想定したい。(八王子古宮式から廻間Ⅰ式前半期の約150年間)

3.3. 銅鐸の東西方位志向・春分と秋分

さて最後に銅鐸埋納における「東西方位の志向性」について少し整理しておきたい。朝日銅鐸(東海派B)はまさに東西が正方位に近い状況で埋納されていた。ちなみにその方位には日が上る象徴的な「猿投山」が見え、春分・秋分には日の出を迎える。これは偶然なのであるうか。同じように東西を強く意識し

た埋納状況を示すものがある。静岡県浜松市「前原銅鐸(三遠式)」はまさに朝日銅鐸とほぼ同様な方法で東西の正方位を保つ。さらに同じく「滝峰銅鐸(近畿式)」も、鈕の方向は逆転するがほぼ正東西方位である。銅鐸埋納には東西の志向性が存在したのであるうか。大変興味深いし、その意味するところは何であろうか。

ここで寺澤薫の銅鐸埋納論を再び参考にして進めたい(寺澤2010)。その中では埋納軸方向について言及されているが、それは環境、埋納地の立地に主眼を向けたもので具体的には谷口や谷間などその場面との関係を重視されている。ここでは特に「方位」を中心に見ていきたい。いくつかの埋納状況から方位を整理してみると、概ね大きく「2つの群」に分類できる事が見えてくる。ただ図の方位が座標・磁北が不明であるため、再検討が必要であるが、一つの方向性として見てみよう。

「2つの群」とは太陽の日の出・日に入りを意識したのであるう「冬至」「夏至」枠の中に収まる一群、これがほぼ主体であり鈕の向きを不

問すれば、銅鐸埋納は特に太陽の軸線を意識した可能性が考えられる。冬至・夏至・春分と秋分、さらに収穫祭等を含めた季節感・暦が推定できるかもしれない。もう一つの一群は南北軸に近く(約25°前後)に傾斜する方向性を持つものである。矢野銅鐸・大福銅鐸・荒神谷銅鐸など。これらは太陽の軸線とは無縁であり、別の何らかの方向性の視点が存在した可能性が想定される。

そこで埋納方法が不明であるいくつかの発見場所・遺跡に立つと、土地点の景観からは谷筋方向や特定の場面・岩や山等を眺めた場合、冬至方向に空間が大きく開ける場合が多々見られる。例えば大垣市十六銅鐸からは陽が沈む方向には「伊吹山」が夏至軸方向に存在し、豊川市千両銅鐸は東方向に吉祥山が位置する。また平尾銅鐸は谷筋からの空間が冬至軸にある。浜松市山田銅鐸や荒神山銅鐸なども冬至軸方向に平野が開ける位置にあることが現場から見えてくる。こうした空間意識が銅鐸埋納地に埋め込まれていた可能性をまずは考えておきたい。これらの視点は、単発的ではあるがすでにいくつかの遺跡にても指摘されてきた

(注3)。さらに直接・近接して地域の産土神を祀る式内社等が存在する点も気になってくる。伊勢の伊坂銅鐸、美濃上加納銅鐸、尾張の二宮銅鐸や上市場銅鐸、加えて外山銅鐸、三河の手呂銅鐸埋納地は矢作川を挟みその真西に式内社が位置する。地域の記憶に沈殿した内のいく

つかは神が宿る空域として整えられていく可能性が見えているのではなからうか。銅鐸の記憶遺産とは「埋納」という事象を持つて創作されていく。その意味するところは地域社会ごとに異なり、個々個別の問題としてまずは評価する必要がある。ここでは地形・方位、風習や歴史的記憶などの視点も加えておく必要性を提示しておくことに留めたい。

4・まとめにかえて

以上やや文化遺産学的思考が多くなつてしまつたが、ここでこれまでの想定をまとめておきたい。

①弥生中期における銅鐸祭祀は、その分布域から東海地域では3つのエリアにおいて主体的に行われ共有されていった。「伊勢雲出川流域を境とする中勢沿岸部地域」「犬山扇状地を除く濃尾平野北部扇状地端

部」「宝飯郡、豊川水系右岸」の三地域。

②濃尾平野全体での扁平鈕式新段階から三遠式銅鐸の変動を踏まえること、濃尾平野では銅鐸祭祀そのものが三遠式銅鐸成立期にはすでに終焉していた可能性が高い(八王子古宮Ⅱ式)。三遠式銅鐸の製作時期は山中Ⅰ式期にはじまりⅡ式期でほぼ終焉する。山中式段階は中国鏡の流入をはじめ多様な青銅器生産が始まつていく段階でもある。多様な価値観の受動とともに、やはり地域社会の大いなる変貌が銅鐸製作・埋納をめぐる歴史に投影されている。

③三遠式銅鐸のデザインが豊川右岸で草案された可能性が高いと思われる。拠点的な集落遺跡が連続する豊川右岸の段丘端、下長山遺跡から式内社「兎足神社」欠山遺跡・瓜郷(寄道)遺跡などが存在する場面が最も相応しい。それは尾張低地部の山中式ではなく豊川水系の「寄道式」エリアとその時代といえよう。ただ何故三遠式銅鐸の製作に踏み込み、分布を広げていったのかは別の問題として興味深い。

④八王子銅鐸や朝日銅鐸には埋納に対応して何らかの表示・標識が存在

した可能性がある。またその場面は強く記憶遺産として意識され、八王子遺跡の場合ではその後の特殊空間(祭場)デザインに大きく影響を与え、朝日遺跡では後期の集落景観デザインのキーワードでもあった。これらは記憶遺産の創出という点において銅鐸埋納の本質を考える上で重要な視点と考えたい。

⑤銅鐸埋納には場所・地点ともう一つ「方向性」が重視された。特に東海地域では東西方向・冬至と夏至などの集落景観ですでに指摘されてきたような部族社会の風習が色濃く反映されている可能性が考えられる(白川2023)。これらを含め埋納キーワードの中心は、その場・その地域社会としての記憶遺産の創設にある。

【注】

1) 雲出川流域、一志郡を中心として「アザカ」地域として話を進める。その南部において明確な銅鐸は出土していないが、多気郡多気町「四匹田」銅鐸が知られている。因みにエリア外とした南勢からは小銅鐸(草山遺跡・白浜遺跡)が2点。また犬山扇状地では余野遺跡では1点出土しており、銅鐸祭祀の終焉後である廻間Ⅰ式前半期に所属する。

2) 伝豊橋市とする4口の三遠式銅鐸があるが、豊橋市域と想定すると豊川左岸の何処かという可能性がある。しかし豊川河口部(豊橋市)はもちろん右岸を含み、また伊那銅鐸の存在から三遠式銅鐸の分布が低地部中心に

あると考えると大変興味深い事になる。また遠江伝井伊谷の銅鐸であるが、外縁付鈕1式からの西遠江の銅鐸分布とその変遷から推察すると、すでに指摘されているようにやはり出土地には違和感が残る。

3) 加茂岩倉銅鐸では、岩陰信仰の神社や出雲風土記の大原郡神原郷の記述などは記憶遺産へ繋がる関係がある。さらには荒神谷遺跡との方位と大黒山の関係などが指摘されている(勝部 昭2001「出雲の大量埋納青銅器」『銅鐸から描く弥生社会』一宮市博物館)。また滋賀県大岩山(銅鐸埋納地)と下之郷遺跡・伊勢遺跡の遺構配置から見えてくる関係(北條芳隆氏ご教示)。特定の山を「聖域化する文化」。天体の動きを意識する文化(北條2023)。こうした視点はなかなか議論の俎上には上がらないが、「記憶遺産の創出」という志向性を総合的に整理する時期にある。

【参考文献】

- 石黒立人1991「弥生時代」『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
- 進藤 武1995「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』第47巻第10号
- 中村光司2000「高茶屋銅鐸観察ノート」『津市埋蔵文化財センター年報4』津市埋蔵文化財センター
- 久保禎子編2001『銅鐸から描く弥生社会』市政80周年記念シンポジウム一宮市博物館
- 難波洋三2001「八王子銅鐸の位置づけ」『銅鐸から描く弥生社会』一宮市博物館
- 加藤安信2001「東三河出土の銅鐸2例」『愛知県史研究』5巻
- 金関怒・佐原真編2002『銅鐸から描く弥生時代』学生社
- 井上洋一2002「銅鐸研究における多角的視点とその成果」『銅鐸から描く弥生時代』学生社

樋上昇2002「八王子銅鐸発掘記」『銅鐸から描く弥生時代』学生社

樋上昇編2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

赤塚次郎2002「主要遺構の変遷」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

加藤安信2003「銅鐸」『愛知県史資料編2 弥生考古2』

進藤 武2004「三遠式銅鐸の成立と解体」『山中式の成立と解体』第11回東海考古学フォーラム

難波洋三2005「銅鐸の埋納と破壊」『西側遺跡(Ⅰ)』豊川市教育委員会

2007『浜松市の銅鐸』浜松市博物館

赤塚次郎2009「朝日遺跡標準層序の暦年代」『朝日遺跡Ⅶ』総集編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第154集

寺澤薫2010「銅鐸埋納論」『青銅器のマツリと政治社会』吉川弘文館

難波洋三2011a「銅鐸群の変遷」『豊穰をもちたらず響き銅鐸』大阪弥生博物館

難波洋三2011b「扁平鈕式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』安土城考古博物館

鈴木一有2014「松東遺跡における銅鐸破片出土の意義」『松東遺跡3次』浜松市教育委員会

森岡秀人2019「紀元前の弥生社会における最古の銅鐸埋納」『松帆銅鐸と弥生社会』季刊考古学別冊28 雄山閣

難波洋三2021「突線鈕1・2式銅鐸とその相互関係」『大岩山銅鐸の形成』野洲市銅鐸博物館

北條芳隆2023「考古天文学と古代の景観」『考古天文学と古代の景観』しだみゅー歴史講演会

白川美冬2023「埋葬方位研究の行く末」『考古天文学と古代の景観』しだみゅー歴史講演会

赤塚次郎2024「尾張連草香の文化遺産群」『尾張連草香の國』しだみゅー歴史セミナー記念講演会

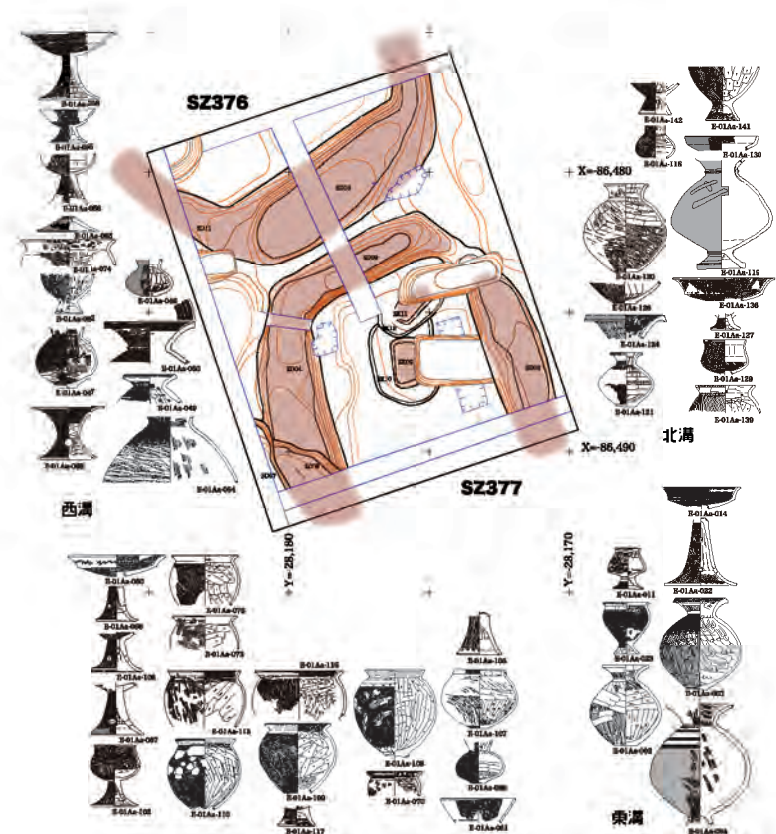


図5 SZ377と出土土器
(蔭山誠一編2007『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集)朝日Ⅶでは01Aa区SZ01。加筆修正(総集編朝日ⅦのSZ377)

一志君の基礎的研究

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 特別研究員

和氣 清章

はじめに

伊勢の地には皇祖神であるアマテラスを祀る皇大神宮が存在する。その神宮の配置には、大和王権の東方進出に、伊勢地方に大きく勢力を伸ばす過程に皇大神宮が成立したとする論がある。しかし、古墳時代前期は伊勢湾西岸地域では前方後方墳を主体とした地域であり、ヤマト王権とは異なる原理で古墳が造営されていたことが知られる。

こうしたことを積極的に捉えるならば『古事記』や『日本書記』の神話に登場する国津神とされる在地の人々が地域に支配権を有していたことと考えられる。そうした地域である伊勢の地名由来を見ると、谷川土清がその地名由来を『和訓栞』に五十瀬が転化したとする説や磯宮が転化したとする諸説がある。こうした立場は、現在の伊勢市周辺を念頭においた諸説である。より古い文献

で取り上げられる伊勢の地名由来は『風土記逸文』にみられる伊勢津彦の名をとり伊勢とした地名由来が存在する。

この記事を見ると、『(前略)天日別命は勅命を承り、東に数百里入っていくと。その邑に伊勢津彦という神がいた。』

天日別命は「汝の国を天孫に献上するか」と問うと、伊勢津彦は「吾はこの国を求めて長らく居住している。敢えて命令を聞かないことにはよう」と答えた。すると、天日別命は兵を起こしてその神を殺そうとしたが、その時に伊勢津彦が、畏み伏して「吾が国は悉く天孫に献上しよう。吾は敢えて居ることもあるまい」と言ったので、天日別命は「汝が去る時には何か験を残せ」と言う。伊勢津彦は「私は今夜を以って八風を起して海水を吹き、波浪に乗って東に入る。これが、吾が退い

た由である」と答えた。そこで天日別命が兵を整えて窺うことにした。すると、中夜に大風が起こって波瀾を扇挙げ、日のように光り輝いて、陸も海も共に朗かになり、伊勢津彦は遂に波に乗って東に去っていった。

古語にはこのようにいわれる。『神風伊勢国、常世浪寄国』といわれるのは、思うにこれ(伊勢津彦)が留まっていたため、このようにいわれるのであろう(伊勢津彦の神は、信濃国に逃げたという)』

と記載される。このことを踏まえると、伊勢は現在の伊勢周辺を指すものではなく、伊勢津彦の支配領域が伊勢を指すこととなり、古墳時代に独自の領域を有していた伊勢湾西岸地域を広く指し示すこととなる。

この説話において、もう一つ重要な指摘としては、古語には伊勢津彦が去る時に起こした神風や浪が、神風伊勢国、常世浪寄国」とし、神宮成立神話にあるアマテラスが示した言葉と重なり、五十鈴川流域を指すものではなく、広く伊勢地域を指し示すものと考えられることができる。

そうした在地の諸勢力を倭の五王武の上表文などで表せられたよう

に、武力により制圧してきたとする記述やヤマト尊の神話などからこの時期に武力により大和王権の勢力が広く列島を制圧したとする英雄綺譚が語られる。しかし、古墳時代前期段階の3世紀〜4世紀には大きくは西日本の東日本のまとまりが存在しており、東海以北の地域に、前方後円墳的ではない、別の部族社会が存在していたことは理解できる状況にある。古墳時代前期においては、個々の地域がまだ地域型の墳墓形式が残存する社会であったと考えられる。

そうした部族社会においては、三雲小津遺跡で出土する人面刻印土器や八重田1号墳から出土する独自の図像文様などから、地域においてそれぞれのカミ概念が存在し、個々の信仰が存在していたことは確実に

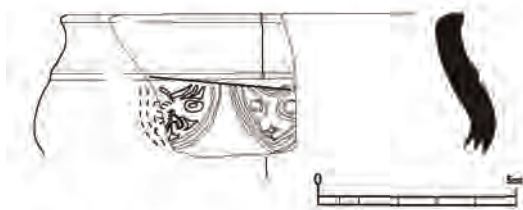


図1 小津遺跡 人面刻印土器

ある。

後節で詳細は検討を行うが、伊勢地域における国津神の原形を伝えるカミとして、大きな候補と考えられるカミは「サルタヒコ」を当てることができる。そうしたサルタヒコの本貫地は倭姫世紀や古事記に登場するアザカ荒ぶる神の阿射加国と考えられる。

2 伊勢国・老師郡の領域

伊勢津彦が原始古代において、現在の三重県の一部を治めて豪族の伝承であると想定することができる。そうした豪族として想定される説話は、同様に存在する猿田彦に係る伝承がある。

猿田彦の伝承を見ると、本居宣長など多くの先学が指摘するように猿田彦は古事記では、猿田毘古大神などと表記され、天孫降臨の際に道案内をした神として登場する。天孫降臨後伊勢狭長田の五十鈴の川上にアマノウズメとともに戻ったとされる。この猿田彦の説話では、その後阿邪訶の海で漁をしているときに、比良夫貝に手を挟まれ溺れたとされる。この時御魂は三つに分かれ、三柱となり、現在の阿坂にある二社と

阿坂嶺にあった社に祀られたとされる。

こうした点から、伊勢津彦や猿田彦をモチーフにした神話の原点になる地域は、阿邪訶や阿坂と記述される地域の豪族たちがその原型になると考えられる。

ではここで記載される領域について見ると、阿邪訶は後の旧郡の一志郡に含まれる範囲であり、基本は旧一志郡域を主体とすることは確実にあるが、「伊勢風土記逸文」では、

「伊勢というのは、伊賀穴志社に坐す神である出雲神の御子の出雲建子命またの名を伊勢都彦神またの名を天櫛玉命は、昔石で城を造つてこの地に坐した。これを阿倍志彦神がやって来て奪おうとしたが、勝てずに帰っていった。よつて、この名となった。云々。」とある。

同様に「伊賀国風土記逸文」にも「この国は初めは伊勢加佐波夜国に属していた。それから20万年余りの時が経つてこの国が見つかった。猿田彦神の娘の吾娥津媛命は、日神之御神が天上より投げ降した三種之寶器の内、金の鈴を見つけて守っていた。」

とあり、かつては伊賀を含めた範

囲が想定される。

また、現在の諏訪大社周辺地に、壹志氏を壹志君が所領した一志郡の領域に関わる説話であると考えられる。

今まで見たように、壹志君とした氏族には、猿田彦、伊勢津彦といった神話伝承を色濃く反映する氏族として捉えることができる。

しかし、前段で見たように、阿射加の荒ぶる神として現れる神と天孫降臨の神話像とはやや異なる側面がある。降臨後、サルタヒコとアメノウズメが姻戚関係となり、アメノウズメが猿女君と呼ばれるようになったとされる。

猿女君については、大和国添上郡稗田郡村に移り、朝廷祭祀に関わつたとされる氏族である。後に稗田氏を名乗る豪族である。

壹志郡の豪族としては「倭姫命世記」には市師（一志）縣造之祖の建皆古命の名が見える。他の文献には建皆古命名を見ることができず、在地の豪族と考えられる。『皇太神宮儀式帳』には建皆子を遠祖とする「壹志県造」や穴太足尼を祖とする「市師宿称」（「天孫本紀」）の名前も見られ、壹志県造は壹師君の官職、市師宿称は壹師君の改姓したものと推

定されている。また、壹志郡に関わる豪族については、「正倉院文書」

に「穂積臣浄麻呂<年卅八/伊勢国壹志郡島拔郷戸主壹志君揆〔族〕祖父戸口」の穂積氏名や日本書記宣化天皇元年5月条に大連物部鹿鹿火の命に新家連が新家屯倉から穀を筑紫に運んだ記事が見られ、壹志郡に関わる氏族として考えられるが、史料には度会郡の郡領家と登場することや「皇太神宮儀式帳」には新家連阿久多が十郷を分かち度会に山田原屯倉を立てたなどの記事もあり、度会郡にも広く勢力を広げた氏族と考えられるが、日本書記の記載のように新家氏については物部氏の関係氏族と推定される。

飯高郡の豪族としては、飯野郡、多気郡にも勢力を伸ばした、伊勢飯高君が存在する。飯高君は孝昭天皇の子天押帯日子命の子孫で壹志氏との同族伝承を有する。また、「倭姫命世記」では飯野高宮に座する時、飯高県造の祖として乙加豆知命が見られる。

飯野郡は天智3年に多気郡4か郷を割いて飯野高宮村屯倉を、評督領として仕奉した久米勝麻呂名が見られ、多気郡の東部海岸線地帯に久米

氏の存在が知られているが、中央の久米氏との関係は不明である。

多気郡の豪族としては、河曲郡でみた大鹿氏や竹連が見える、竹氏は『先代旧事本記』に物部尾輿の子に物部臣竹連名が見えることから、物部氏系の氏族と想定される。

伊勢地域最大の豪族としては前述した、伊勢氏が存在する。前述のとおり伊勢国造の氏として想定される氏族で「新撰姓氏録」によるとアメノミナカヌシ（天御中主命）の子孫でアメノヒワケ（天日別命）を祖とするとされる。天平19年10月14日伊勢国人伊勢直大津ら7人が中臣伊勢宿禰を賜ったとされ、中臣氏と犧牲的同族関係を有する氏族と考えられる。

多気郡には他に、麻積氏や中麻積氏などの氏族名が「皇太神宮儀式帳」に見られるが、麻積部を管掌する伴造氏族であると考えられ、神宮祭祀に深く関わる氏族と考えられる。

度会郡における豪族としては伊勢氏の同族伝承を有する、度会氏31荒木田氏32存在する。度会郡は大化の新政により国郡が樹立された時に、神領を二分し度会、多気の二郡が設

置された後に改姓した可能性が想定される。

鈴鹿川以南の中勢・南勢地域の豪族については、北勢地域の豪族と異なり、渡来系氏族の伝承少なくとも、南勢地域では神宮関連氏族が増える傾向が色濃く残る状況となる。こうしたことは、志志郡、飯高郡の豪族について本来詳細に検討する必要がある。

3 志志君の基礎的研究

(1) 神話から見た志志氏

前述したように北勢や南勢地域の豪族の状況と大きく違う地域としては、安濃郡や志志郡、飯高郡の豪族が存在する。こうした氏族の中で大きな氏族として、志志氏が存在する。

志志氏は「古事記」によると、孝昭天皇が尾張連祖奥津余曾の妹ヨソタヒメを娶り、天押帯日子命と大倭帯日子国押人命を生みとされる。兄の天押帯日子命は春日臣、和珥氏、大宅臣、粟田臣、小野臣、柿本臣、吉比草臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟那臣、都怒山臣、伊勢飯高君、志志君、近淡海国造の祖となったとされる。天押帯日子命

系譜の氏族として位置づけられる。

個々の氏族の状況を見ると、春日氏は、和珥氏一族の一部とされ、大和国添上郡に居住された氏族とされ、多数の後妃を出す氏族である。

特に和珥（和爾、丸爾）氏は、現在の天理市樺本に本拠を有した豪族として知られ、応神天皇以降（応神、反正、雄略、仁賢、継体、欽明、敏達）に后妃を出し、大和の葛城氏に並ぶ豪族として知られる。和珥の出自については、天押帯日子命の子孫とされるが、記紀に天押帯日子命名がほとんど見られないことから、在地豪族や初期段階の渡来系氏族とする論が出されているが、在地系の豪族であると考えられている。天押帯日子命系譜の各豪族の本貫地については、広く畿内周辺の地域に勢力を広げていたことが知られることができる。

そうした系譜を有する志志氏であるが、古事記などに登場するのは、孝昭記のみであり、他に見ることができない氏族である。しかし「三代実録」には志志宿禰吉野の名が見え、貞観四年七月に大春日朝臣の姓を賜った記事が存在するなど春日氏系の氏族として一定の勢力を有して

いた氏族と考えられ、志志郡の在地豪族が、和爾氏と比較的早い段階に姻戚関係を有し、地域に勢力を有していたと推定される。

その前代に位置づけられる、志志郡の豪族の姿としては、「倭姫命世記」に記載された阿射加の荒ぶる神の説話が存在する。元来、「倭姫命世記」は平安時代末から鎌倉時代に度会神道の経典として編纂されたものであり、そこに歴史的事実が反映されたとは言いがたい書物であるが、「古事記」の云書に記載された宇礼志乃の地名伝承に阿射加の記載記事が存在する。

「日本書紀」によれば垂仁廿五年「皇女倭姫命大神を奉じて倭笠縫邑から近江、美濃を経て」とする伊勢神宮鎮座の記述に関わる記述として表される神宮成立に関わる内容がある。これが「倭姫命世記」では伊勢に入り、桑名野代の宮、鈴鹿忍山の宮、阿射加藤方片樋の宮と続く。

この阿射加藤方片樋の宮については、現在の津市加良比乃神社周辺地を比定する案と松阪市の阿射加神社を比定する諸説が存在するが、四ツ野遺跡の近接地であることを想定すれば、阿佐賀の国の領域に含まれた

とするのが妥当である。

この説話註に「藤方片樋の宮に御遷幸になったとき、阿佐加の峰にイズハヤブルカミ(伊豆速布留神)が百往く人は五十人を取り殺し(略)」と在地の神と争いになった記述が見られる。その後、「荒ぶる神を奉つて、その神の心を和め給い、阿佐加の嶺にその神の社を建て鎮め祭り給うたところが、神の荒びが初めて止んだ(略)」とされる。「倭姫命世記」の記述によるが、皇祖神を受け入れる上で、それ以前地域において勢力を有していた豪族側の状況をよく表す説話と考えられる。

こうした、大和王権への反乱伝承は、雄略記に見える「吉備氏の反乱」や継体記の「筑紫磐井の乱」42などがあるが、久志本氏が指摘するように雄略記にある「朝日郎の乱」は、この一志郡であった反乱の記述である。

『雄略天皇十八年(甲寅四七四)八月戊申【十一】』

十八年秋八月己亥朔戊申。遣物部菟代宿禰。物部目連。以伐伊勢朝日郎。朝日郎聞官軍至。即逆戰於伊賀青墓。自矜能射。謂官軍曰。朝日郎手、誰人可中也。其所發箭、穿二重

甲。官軍皆懼。菟代宿禰不敢進擊。

相持二日一夜。於是。物部目連自執大刀。使筑紫聞物部大斧手、執楯叱於軍中、俱進。朝日郎乃遙見。而射穿大斧手楯・二重甲。并人身肉一寸。大斧手以楯斃物部目連。目連即獲朝日郎斬之。由是菟代宿禰羞愧不克。七日不復命。天皇問侍臣曰。菟代宿禰何不復命。爰有讚岐田虫別。進而奏曰。菟代宿禰怯也。二日一夜之間、不能擒執朝日郎。而物部目連率筑紫聞物部大斧手。獲斬朝日郎矣。天皇聞之怒。輒奪菟代宿禰所有猪名部。賜物部目連。』

こうした記事が、「倭姫命世記」の記述に影響を与えたとできる。

上記雄略紀中に、朝日郎は伊賀青墓に出て迎え撃つたの記述があるように、朝日郎の支配領域が伊賀の一部まで存在していることが考えられることができ、「伊賀国風土記逸文」に登場する伊勢津彦が伊賀国穴石神社46に石をもって城を築くなどの記述と共通し、一志郡の豪族が風土記逸文に登場する伊勢津彦であると考えられる。

風土記の逸文では神武東征時に天日別命に国譲りをし、海を渡つたとする記述もあり、伊勢全体に影響を

及ぼした氏族であることが窺える。

大和国添上郡稗田に本拠を移し、後に稗田姓49と称したとされる氏族である。

吉志氏については、一志郡の在地豪族であると考えられ、断片として残る伊勢関係の神話の中で中心的な氏族であることは上記のとおり確実な氏族であると考えられる。

(2) 一志郡内の前方後方墳

こうした吉志君の所在した範囲である旧一志郡の3世から4世紀の古墳の状況は前方後方墳が集中して存在する地域である。

この前方後方墳は中村川流域に5基が確認されている。流域内の状況は右岸で確認されている古墳としては庵ノ門1号墳、西山1号墳が沖積平野の独立丘陵上に位置する古墳である。

庵ノ門1号墳は、標高28mの独立丘陵上頂部に造営された古墳であるが、墳頂部に祠の設置や周辺の改変が激しくその墳形については検討を有するが、昭和63年実施した墳丘測量では、墳長約36m、後方辺20・5m、高さ4・5m、頂辺約10m、前方部長16m、高さ1mを測る。現

時点ではこの時期に属する遺物は確認されていないが、周辺に土師器辺などの採集がされている。主軸方位はN-91°Eである。

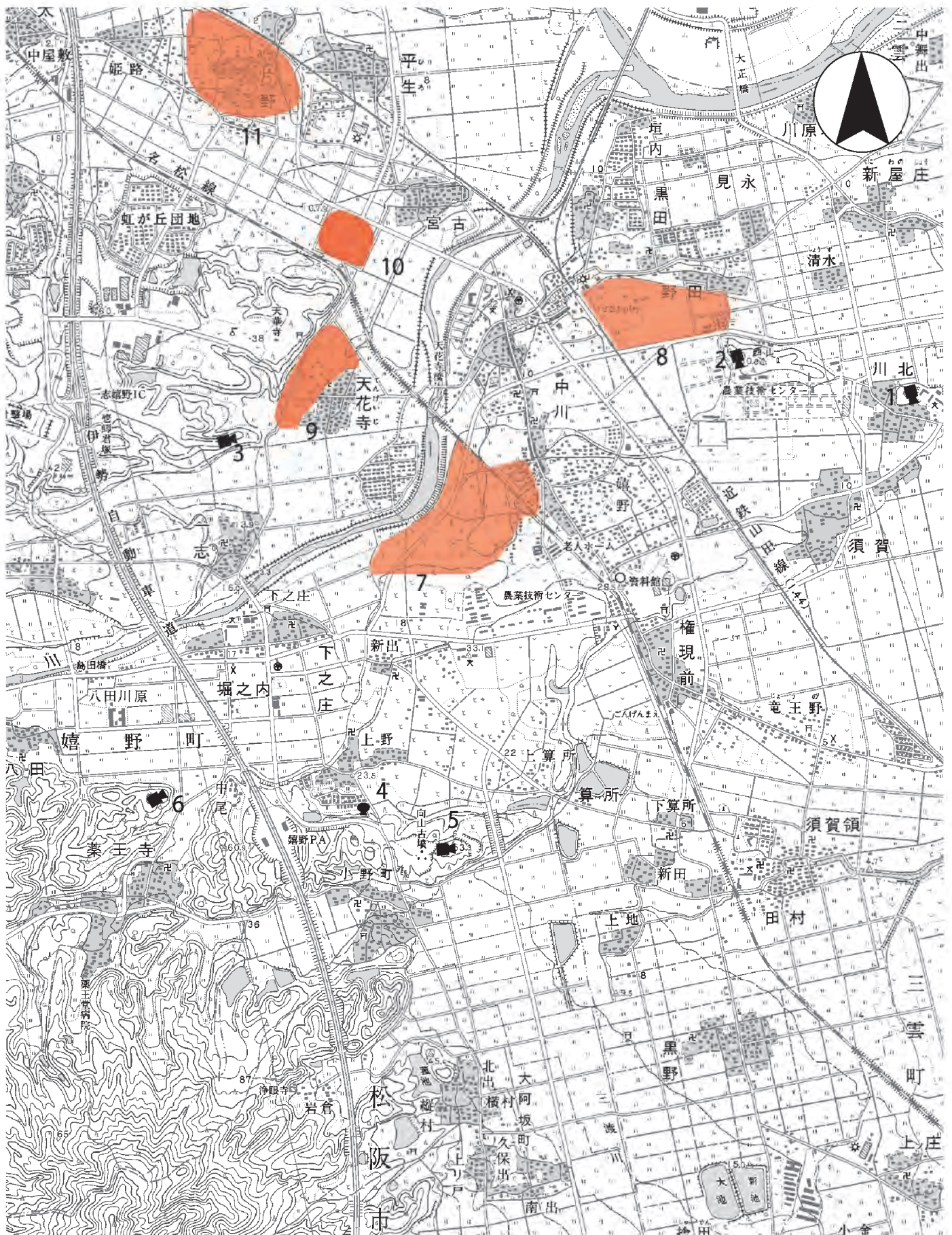
1号墳の北側に8m前後の小型円墳が確認されている、ほか後方部にわずかに溝状のくぼみを確認される。外表施設としては葺石などが存在しない。

後に後述するが墳丘規模などからすると西山1号墳より先行する古墳として考えられている。

西山1号墳は、庵ノ門1号墳と同様に沖積地に所在する、標高35mの独立丘陵上に位置する。

昭和37年実施した墳丘測量では、墳長約43・6m、後方辺24m、高さ4m、頂辺約13m、前方部長17・5m、幅11・4m、高さ1・2mを測る。主軸方位はN-37°Eである。

墳丘頂部に昭和37年測量調査前日に墳頂部を大規模に盗掘にあい、その主体部の構造や出土品の詳細については不明であるが、測量調査時に墳頂部に割石などが全く確認されないことなどからすると、主体部については粘土廓である可能性が存在する。



1 庵ノ門 1号墳、2 西山 1号墳、3 筒野 1号墳、4 上野 1号墓、5 向山古墳、6 鏑山古墳、7 下之庄東方遺跡、8 片部貝蔵遺跡、10 堀田遺跡、11 片野遺跡

図2 中村川流域周辺の遺跡位置図

現存する墳丘は昭和40年代に道路拡張工事に後方が大きく重機に削平されるといったことを受け、測量図を元に復元されたとされてきた。平成12年に墳丘部の改変がどのように行われ、現状確認を行うために、主軸方向の範囲確認調査を実施した。

調査の概要は

1号墳の北側に8m前後の小型円墳が確認されている、ほか後方にわずかに溝状のくぼみが確認される。外表施設としては葺石などが存在しない。

測量調査及び中央部のトレンチ調査で、全体が削平された状況の確認を行ったが、トレンチ断面観察を行う限り、後方部については3分1程度東側について削平を受けており、個々の基底部及び前方部については削平が受けていないものと観察できた。

しかし、前方部については、墳丘盛土が概ね50cm程度で、その下層に旧表土である、黒色層が水平に後方部に向けて堆積することが確認された。こうした状況からすると、西山古墳の墳丘造営は、愛知県東之宮古墳と同様に全面盛り土により構築

されているものと推定される。

また、西側に後方部墳丘裾から2m程度離れた地点に方形の造り出し状の平坦面が確認されることなどから、別区の祭祀などの区画が存在している可能性がある。

中村川の下流域の独立丘陵に位置する2古墳は出土遺物などがないためその所属時期は不明であるが、共に葺石を有さないなど、共通することから後述の筒野1号墳より先行すると推察される。

筒野1号墳

中村川左岸に大きく発達した天花生丘陵から派生する標高40mの丘陵頂部に位置する。墳長約45m、後方部辺28・5m、高さ3・5m、頂辺13m、前方部12m、長さ16m、高さ14mを測る。外表施設としては、葺石を有する。

主体部については、大正年に地元豊地村が郷土史作成の為に地元民による発掘調査が行われ、その後後藤守一氏の聞き取りにおいて粘土槨であることが確認された。

出土遺物としては主体部内から三角縁天王日月獣文帯三神三獣鏡1面、三角縁波文三神三獣鏡1面、位至三公鏡1面、水晶製切子玉6、水

晶製管玉2、石釧1が出土し、槨外から四神二獣鏡が1面出土する。他

に1点面取りが行われた、瓢箪型の石製品があるが、筒野1号墳からの

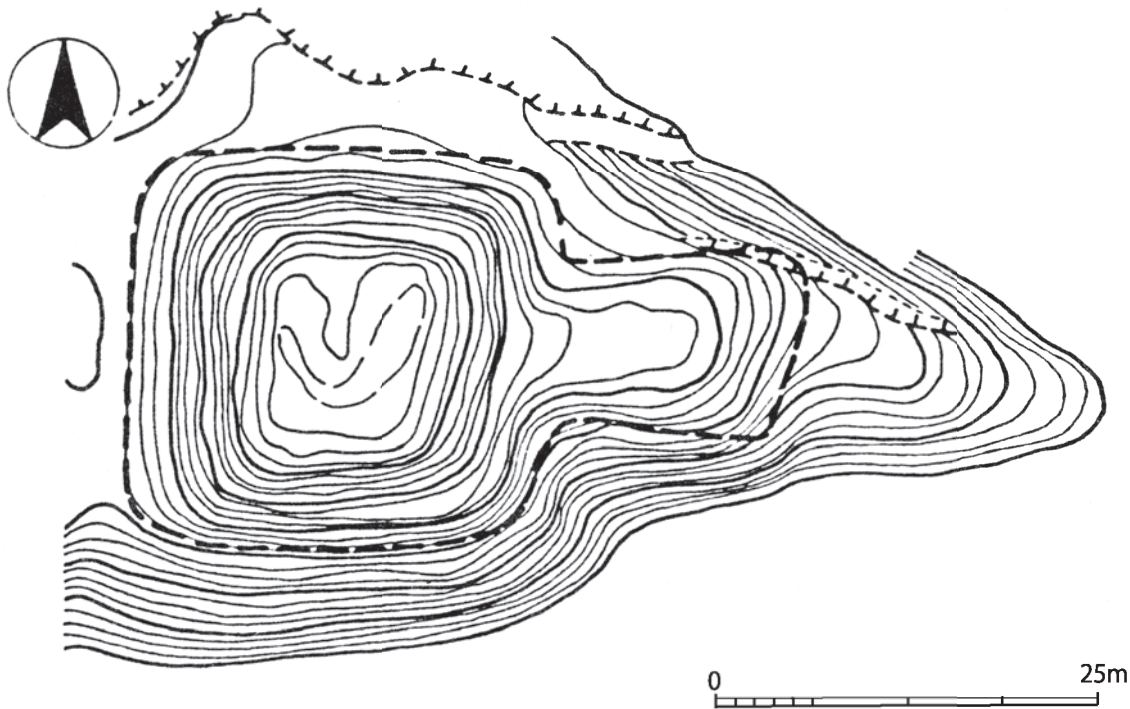


図3 筒野1号墳墳丘図 (1/500)

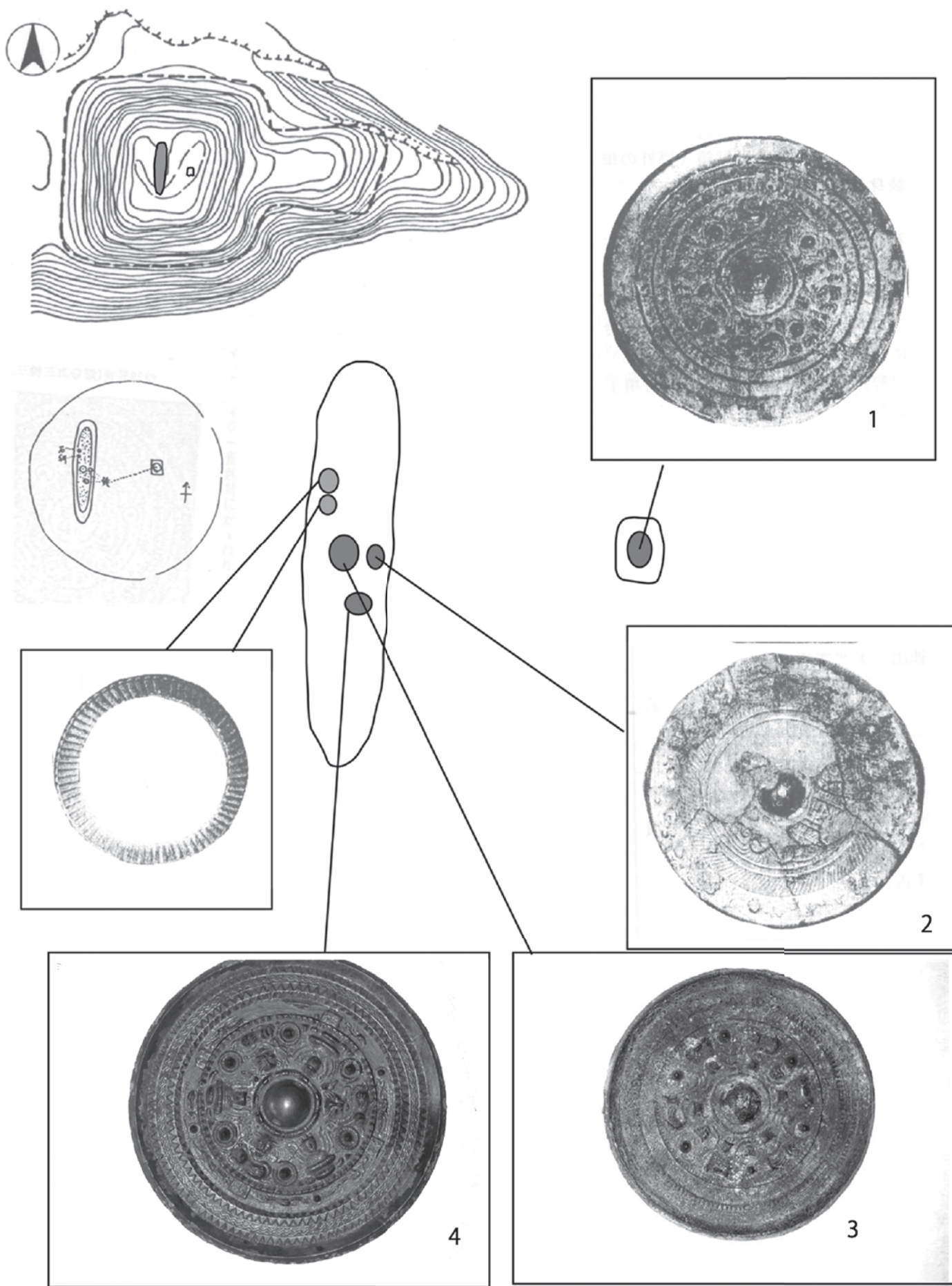


图4 筒野1号墳主体部出土状况

出土としかわからない。

後藤氏6の出土状況の聞き取りから復元すると棺中央部に三角縁波文三神三獣鏡、足元部に三角縁天王日月獣文帯三神三獣鏡、中央部東寄りに位至三公鏡、中央部やや北側に石釧が出土する。

鏡については、三角縁波文三神三獣鏡と四神二獣鏡については明確な布痕跡が確認することができ、四神二獣鏡・三角縁波文三神三獣鏡ともに鏡面部を包むような布痕跡が確認することができ、箱などの外容器に収められて副葬された可能性は極めて高いものと考えられる。

また、三角縁神獸2面についてはその残存状況が大きく異なり、三角縁天王日月獣文帯三神三獣鏡については鏡全体の錆化がさほど見られないのに対し、三角縁波文三



写真 筒野石製品

神三獣鏡は全体に錆化が進む状況にあり、粘土槨内と外に位置した可能性も考えられる。

石釧については1点のみ確認され、釧石材は石材に黄色い縞状の貫入が見られるなど所謂土岐石の特徴を示すものである。水晶製切子玉は6点、管玉が2点棺内から出土している。かねてから水晶製の製品が存在することから時期については後出するのではないかと指摘も存在するが、近隣に水晶産出地存在することなどから前期の範疇にとどまると考えられる。また、一志郡史には2例の筒型石製品が伝高取塚出土とされる出土品があり、筒野1号墳ではされるが、石材や形式的にはやや後出するものであり、天花寺出土の合子などの出土古墳ではと推察される。

また、地元筒野1号墳から出土したとする多面形をした瓢箪形の石製品が伝わっているが、他に類例を見ない。

墳丘の形状や副葬品の状況を加味すると、前述の尾張東宮古墳と同時期の前方後方墳と考えることができる。

向山古墳

中村川の右岸に発達した丘陵の標高mの高位段丘に位置する。墳丘は

全長71.4m、後方辺40.2m、

高さ5.4m、頂辺20m、前方部幅26.7m、長さ31.2m、高さ3mを測る。外表施設としては人頭大の葺石が確認できる。後藤報文では墳頂部に埴輪列が存在すると報告されているが、墳頂部表層遺物などでは壺型土器の破片のみが確認されることから垂が巡るものと考えられる。

筒野1号墳と同様に豊地村が郷土史を作成するときに一部発掘がされ、主体部などが確認されている。その後筒野1号墳と同様に後藤守一氏の聞き取りにおいて粘土槨であることが確認された。

後藤氏の聞き取りでは、粘土槨の北端に径7.7寸(22cm前後)の大型の鏡が中央部に小型鏡1面、南端に1面の3面が出土したとされる。現在東京国立博物館に所蔵される鏡は、小型鏡としては3点所蔵されており、櫛歯文鏡、内行花文鏡、獸形鏡が所蔵される。現状としては1点、埋蔵物録と整合しない状況であり、その経緯については不明である。

また大型鏡については当初より、所在は不明になっておりその鏡式は不明であるが、22cm前後の大型鏡であることから、三角縁神獸鏡や画文

帯神獸鏡などが想定されている。

他に車輪石3、石釧11、筒型石製品2は同様に東京国立博物館に所蔵されるが、刀身2、槍身3については不明となっている。出土状況は各中央部より南に各側面に石釧が4個の8点と刀身が並び、南端両側に3個の計6点が並び、その端に筒型石製品が配置されたとする。粘土槨外に槍が3並列して出土したとされる。

石釧の配置としては、伊賀石山古墳のように頭部に集中した埋葬されたものではなく、棺内に遺体にそう形で配置されたものと推定される。

各石製品の詳細については、車輪石、石釧ともに碧玉製の製品である。石釧においては大きくは、北条2類と3類が確認され、複数の形式を有するなどの特徴を見ることができ

る。表面採集された壺型土器については小破片であるが、二重口縁壺の口縁部と穿孔が施される底部片であり、西野7号墳12より先行する時期が想定することができる。

鑄山古墳

中村川左岸の掘坂山から端を発する東西に伸びる丘陵の標高55mの丘陵先端部の頂部に主軸を東西方向に

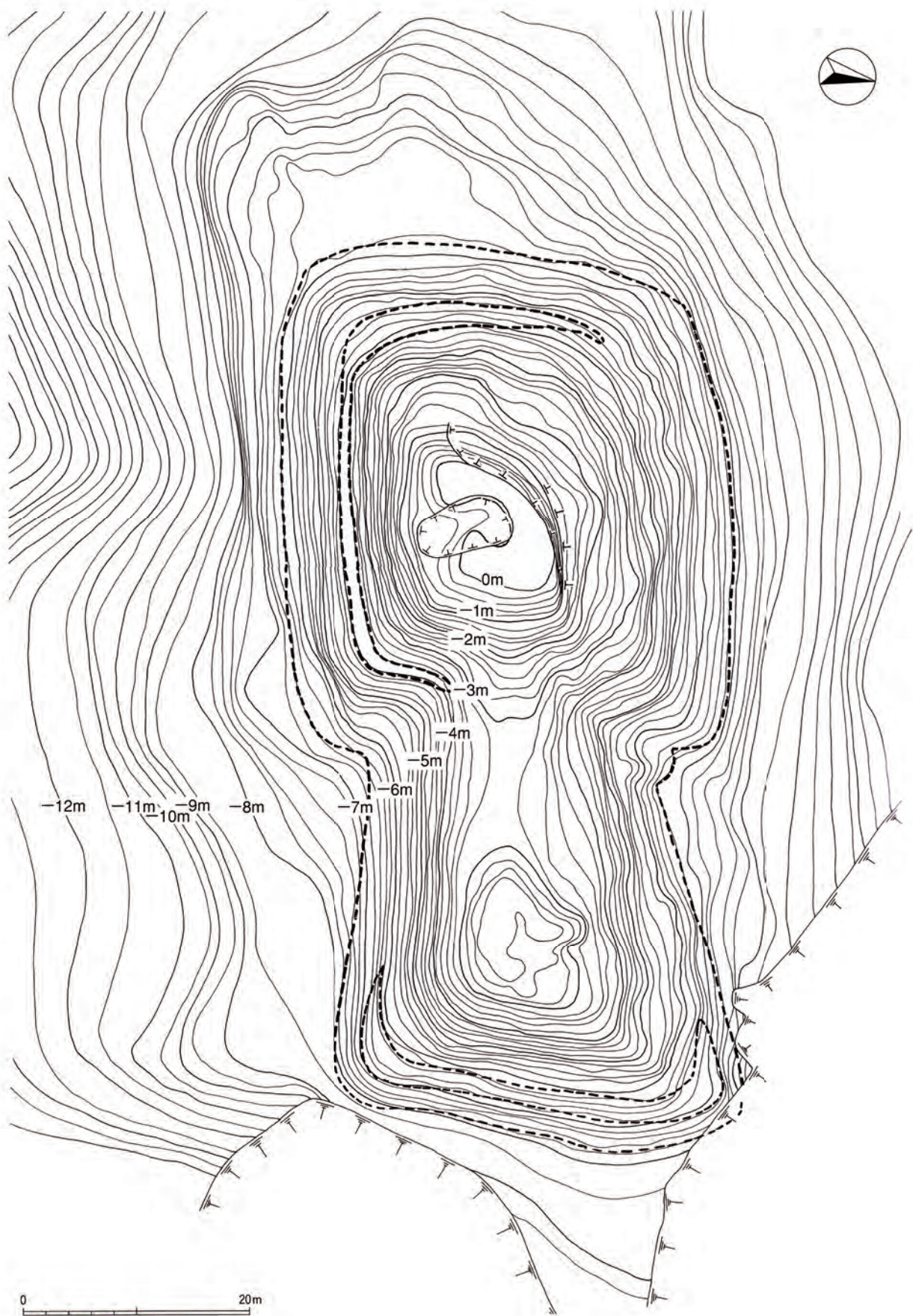


图5 向山古墳墳丘圖 (S=1/500)

向け構築された前方後方墳である。昭和60年周辺の土取りに伴い範囲確認調査が実施されその実態が確認された。

調査では全長45m、後方辺28・4m、高さ4・8m、前方部幅18m、長さ18・6m、高さ2・4mを測る。外表施設としては葺石を伴い、後方にわずかに傾斜角度が異なることから2段築成と想定されており、基底部は人頭大の河原石を基底石とし、その上段を20cm前後の河原石を持っている。

主体部は、他の前方後方墳が粘土槲によるものであるが鑄山古墳の主体部は、長辺7・3m、短辺5・5mの長方形を呈し、堀方株で大量の木炭が確認された。底面はほぼ平坦面であることから、幅2m長さ6m前後の組み合わせ木棺が想定される。全体に主体部は後世の盗掘によりその出土遺物などは調査当時不明であったが、平成12年より実施した埴野史編纂事業で筒野、向山、鑄山古墳の調査メモが確認され、主体部には鏡2面、剣の出土が報告されているが、詳細については不明である。中村川流域に所在する前期古墳としては、上述の前方後方墳が確認さ

れており、その先行段階の古墳としては、向山古墳近辺の丘陵に所謂纏向型前方後方墳とされる墳長20m前方後方墳形周溝墓上野1号墳丘墓が存在する。一部丘陵壁面が削平され、後円部がない大型の壘が、確認されるとともに、丘陵裾部でS字口縁台付き甕（B類）の破片が確認され。女牛谷SX4に連なる墳墓と考えられる。

流域の前方後方墳の編年的な位置付けとして明確に出土品が存在する古墳としては、筒野1号墳、向山古墳の2古墳のみであるが、今までその編年的な位置付けを行われてきたところであるが、太極としては、庵之門1号墳、西山1号墳で前方部があまり発達しないB3-I類と前方部が発達し、後方部の倍以上となるB3-II類に分けることができる。B3-II類は主に葺石を伴うものと想定され、1類II類の中間に筒野1号墳が位置付けることができ、編年表のとりの位置付けがかんがえられ、出土遺物が確認される筒野1号墳は前方後方墳集成II-III期、向山古墳がIII期と位置付けられ、先行する庵之門1号墳、西山1号墳はI-II期段階と考えられる。

向山古墳と鑄山古墳については、向山古墳の出土石剣が天花寺丘陵上の西野3号墳出土の石剣より先行することなどからIII期に位置付けられ、墳丘形態上では大きな差異を見ることができないが、埋葬施設を木炭槲であることなどから、鑄山古墳は前方後方墳の最終段階と位置付ける。

こうした前方後方墳の集中する中村川流域であるが向山古墳・鑄山古墳の造営後大型の古墳造営は見られなくなり、50m前後の帆立貝式古墳へ変化する。

4 結語

こうした古墳群の変質を受け地域社会を形成していく。こうした地域社会における出来事は大和王権に記録されるところでは、古事記、日本書紀の記載記事は雄略朝前後に記録が増加する。また、壺志の君は先代旧事本紀には、物部氏と姻戚関係が結ばれたことが知られる。神功皇后摂政三年一月条に登場する、物部五十琴の母に市師宿禰の比咩古の名が見えるように、この地域に関わる文献記録に、物部氏との姻戚関係が色濃く見えるようになる。

そうした背景は、雄略朝紀に登場

する伊勢関係の記録が増加する段階以降に積極的に中央豪族が姻戚関係を進めた可能性が想定される。

そうした背景を受け、後期屯倉に位置づけられる継体朝前後に新家屯倉の設置や物部氏の進出があったとするのが妥当である。

伊勢地域の豪族との婚姻関係は、地域の豪族層の状況から見ると、雄略朝の朝日郎の乱が示されるように地域社会では大きな反発があると考えられる。こうした地域豪族と大和王権との関係は、5世紀代に、伊勢地域の初期須恵器生産の再編成などがまさしくこの雄略朝段階であるTK23～TK47段階である。こうした再編に至る前段階に多数確認される、韓式系土器や製鉄などの渡来形氏族の流入など大きく地域社会が変質する過渡期の段階に位置づけることができる。

5世紀における社会は、伝統的な地域社会から、倭国社会への変換期であり、こうした時期を経て、継体朝の地域再編の倭国社会が到来したものと想定でき。この時期の東海社会が再度畿内社会への進出が進み、大和王権の再編へ至ったと推察される。

母なる山「恵那山」と志段味古墳群

NPO 法人古代遷波の里・文化遺産ネットワーク

服部 哲也

志段味古墳群を初めて訪れたのは
大学2年の頃ですから40年以上も前
となります。その後、発掘調査の担
当者として携わり、退職後の現在は
指定管理者の一員としてもかわつ
ています。そんな長い付き合い（？）
の志段味古墳群ですが「なぜこの地に
多くの古墳が築かれたのか？」は今も
疑問のままです。

退職後、遺跡や古墳を、周辺を含
めて歩きながら案内する機会を得ま
した。ピンポイントでは何度も訪れて
いた遺跡や、発掘調査を担当していた
遺跡ですら、あらためてゆつくりと歩
いてみると、全く違う景色が見えるこ
とにとっても驚いています。「弥生のコ
メ作りのムラ」をテーマに庄内川中
流域を歩いた時に、その上流に恵那
山がどっしりとそびえていることに
気づいたことも驚きの一つでした。恵
那山から川の水が滾々と湧き出てく
るかの様な景色は、当時稲作にいそし

んだ人々が、恵那山を豊かな水を生む
母のように感じ、崇める心が湧き立つ
たに違いない！と、思えた瞬間でした。

恵那山の名前は、伊邪那岐（いざ
なぎ）・伊邪那美（いざなみ）の二神が、
神坂峠にて天照大神をお生みになつ
て、その胞衣（えな）を山に収めたこ
とが由来とされます（恵那神社HP
より）。したがって恵那山（胞衣山）
は神体山であり、延喜式神名帳の恵
奈神社も当初は山頂（2,191m）
に鎮座（現在の恵那神社奥宮本社）し
ていたと考えられます。

恵那神社は当然ながら伊邪那岐大
神・伊邪那美大神を主祭神とします
が、その二神に、天照大御神（あま
てらすおおみかみ）・須佐乃男尊（す
さのおのみこと）・月読尊（つくよみ
のみこと）・蛭子尊（ひるこのみこと）
の四柱を加えて祀った神社が、実は
名古屋市北区を中心に集まっていま
す。多くは六所社（上記6柱神を祀つ



写真 西区庄内川橋から望む母なる山「恵那山」（撮影：中野耕司）

た神社)ですが、別小江神社と大乃伎神社の式内社も含まれます。名古屋ではこの一角だけに集中していることが指摘されています(名古屋神社ガイド <https://jinjagoya/>) が、この地からの恵那山の眺望からすれば、明らかに恵那山への信仰からであることと大いに納得します。庄内川の水を使って、お米作りを行った人々が、恵那山を崇めていた証左ともいえるのではないのでしょうか。

では、志段味古墳群は恵那山と庄内川との関係において、どのように考えられるのでしょうか。志段味古墳群は、東谷山とその山麓、そしてそれに続く段丘に立地しています。東谷山は名古屋市の最高峰(たった193mですが)で、庄内川(土岐川)の流れが山から平野に変わる、その接点に位置しています。したがって、対岸の高座山(神の宿る岩がある)とともに、庄内川が通過する最後の山となります。同時に、最後の谷でもあり、東谷山(東の谷の山)は、平野側から見たままの名前とも言えましょう。そして、平野側から望んだ時には、恵那山からの水が、平野に流れ落ちる、まさにその場所が志段味なのです。志段味の語源が「下垂水」(しだみ⇓下

に垂れる水)としたのは、津田正生で、嘉永3年(1850年)の「尾張神名帳集説訂考」に見ることができま

す。とても的を射た解釈ですが、私はさらに「恵那山から下に垂れる水」と思っています。

恵那山からの水(厳密には恵那山を水源とするわけではありませんが、そう見立てて)を使つてのコメ作りは、北区から西区にかけての庄内川左岸の後背湿地がメインとなります。先にみた、式内社や六所社が集中するエリアです。そこで力を蓄えた共同体のリーダーが、「しだみ」を母なる水が落ちる聖なる地として、造墓活動を行った。志段味古墳群の始まりを、今はそんなイメージで想像しています。

2018年にオープンした志段味古墳群のガイダンス施設では、志段味に古墳が築かれた理由を、「陸の交通と川の交通との接点」と解釈し、アニメーション映像によって説明づけています。映像は分かりやすく伝える効果があると同時に、一方的なイメージを植え付けてもしましますので、とても気になっています。

今回は、私も一つの幻想を提示しましたが「なぜ志段味に古墳が築かれたのか」は、今も謎だと思っています。

謎に対して、いろいろな仮説を交えながら古(いにしえ)を想像することが遺跡を楽しむ醍醐味でしょう。これからも、さまざまな「謎」を遺跡の現地に立つて大いに想像したいと思

います。

謎に対する答えは敢えて求めない。それも良いのではないのでしょうか。

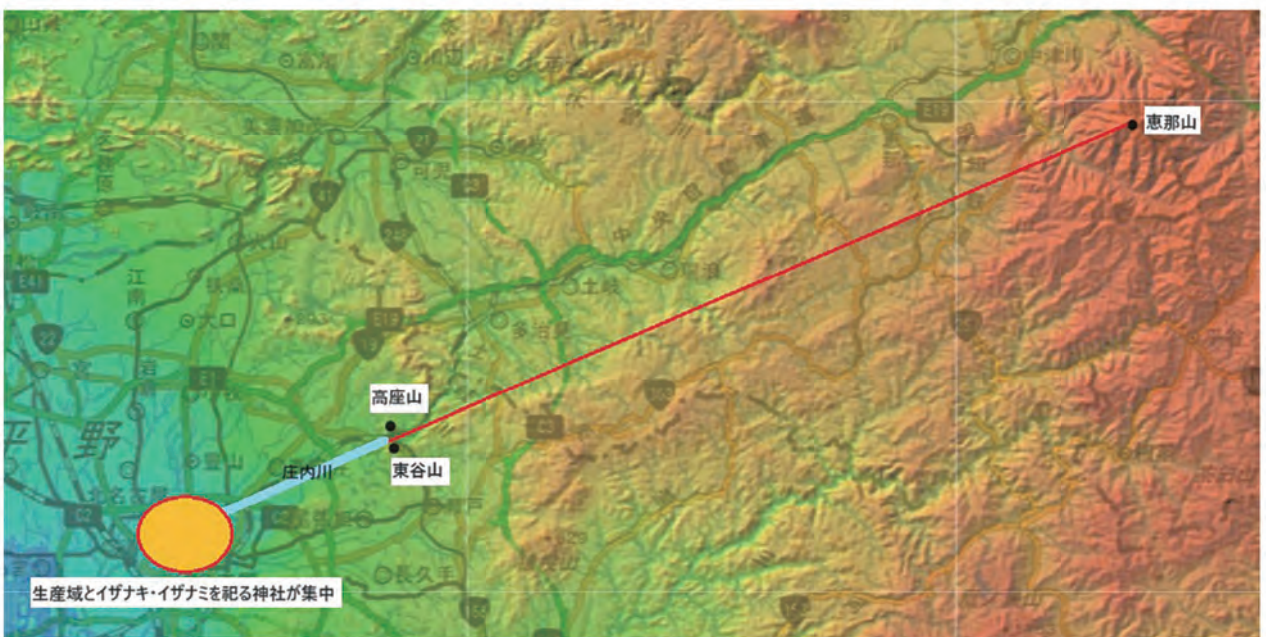


図 恵那山・東谷山・庄内川そして開拓地との関係図 (国土地理院色別標高図使用)

絵葉書から見る昭和初期の入鹿池

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

望月 友恵

入鹿池の観光開発

犬山市、特に犬山城下町は愛知県屈指の観光地と言っても過言ではない。この観光地・犬山としてのイメージが強く打ち出されたのは、大正末期から昭和初期の頃であった。全国的な観光ブームを背景に、犬山城下の木曾川の風景をドイツのライン川に準えて「日本ライン」と称し、新たな名所の創設や観光パンフレットの刊行など、様々な観光事業が盛り上がりを見せた。時を同じくして、犬山市内（当時は丹羽郡池野村内）にあった入鹿池周辺でも観光開発のムーブメントが起こっていた。

入鹿池は灌漑用として寛永10（1633）年に築造された人工の溜池であるが、古くから風光明媚な「名所」としても認知されており、『尾張名所図会』にもその景観が取り上げられている。そして大正から

昭和初期にかけて、犬山と同じく入鹿池にも観光地としてのスポットが当てられることになったのである。

平成6年に刊行された『入鹿池史』によると、昭和5年に入鹿池遊船株式会社設立され、入鹿池での遊覧ボートが開業、昭和7年に堤防に桜並木が植栽されると多くの観光客が訪れるようになったようである。また、現在の明治村南端付近に料理旅館「富士家」や、天道山に貸別荘が建てられるなど遠来の観光客を受け入れるための宿泊施設も充実していった。

絵葉書からみる昭和初期の入鹿池

絵葉書①・②・③は尾張富士遊園土地株式会社から発行された『入鹿名勝御繪はがき』（図2）に封入されていた絵葉書である（図3・5・6）。発行年は不明だが、内容から昭和初期に発行されたものと推測さ



図1 入鹿池周辺地図（電子国土webに加筆）

れる。この3枚の他にも尾張富士大宮浅間神社や山伏の滝など周辺の名所の絵葉書が計9枚封入されている。

絵葉書①は一番奥に尾張富士がみえ、その左手前の丘陵上には「富士家」の屋根がみえている。『入鹿池史』によると天道山には展望台が作られ、山に向かって段丘に貸別荘が



図2 「入鹿名勝」御繪はがき

あり、下に舟が着いたとある。絵葉書①はこの天道山の舟着場から尾張富士方面を眺めた景色であろう。

絵葉書②も同様に左奥に尾張富士がみえている。尾張富士麓の丘陵や貸別荘と湖面の位置関係から、やや高いアングルから撮影されているものと思われる。天道山に建てられた貸別荘からの景観ではないだろうか。

絵葉書③は、左奥に本宮山、その右に尾張富士の裾部分が見える。池の中に小島が見えるが、現在の入鹿大橋の南西あたりに水位が下がるとみられる小島（虫鹿島ともいわれる）であろう。背景と別荘の遠近感や本宮山の山容にやや違和感を覚えるが、図1の網掛けで囲んだ高台のどこかから、本宮山方面を眺めた景



図3 絵葉書①「入鹿池の大観〈入鹿名勝〉」



図4 天道山西側付近からの景観
左手奥に尾張富士、その手前に明治村の
建物が建つ丘陵がみえる。



図5 絵葉書②「貸別荘より見たる入鹿池と尾張
富士〈入鹿名勝〉」
背景に映る尾張富士には、池に向かう道路
うっすらとがみえる



図6 絵葉書③「貸別荘鈴蘭の家より見たる名月
〈入鹿名勝〉」
絵葉書②の別荘と同じようなモダンなベラ
ンダがある貸別荘であるのが分かる



図7 「入鹿池附近の勝地と史跡」

【参考文献】
入鹿池史編纂委員会「1994『入鹿池史』入鹿
用水土地改良区

【注】
スイス・ジュネーブのレマン湖に準えてこの
ように呼称された。

色と推測される。十三塚古墳群近く
の高台には、別荘跡地と思われる整

地した敷地や門などが現在も残って
おり、『入鹿池史』などには記載は
ないが、池の東側エリアにも別荘が
建てられていたと考えられる。

昭和5年に発行された観光パンフ
レット『入鹿池附近の勝地と史跡』
(図7)には、以下のように入鹿池
が紹介されている。(一部抜粋)

バスが羽黒から池まで通つておま
す／近いうちには電車もひけるでせ
う／尾張富士の表参道から裏山へ廻
り／堤防へ出るドライブ道路は工事
中です

入鹿池の堤から／更に南へ本宮山

の／裏を通つて大縣神社の南へ出れ
る／ドライブ道路も工事中です／早
く完成する様急いで居ます

尾張富士の裏山で眺望絶佳の地を
選び／民衆的のホテル・料理店簡易
食堂温泉など／道路が出来るとドン
ドン建てます／別荘や住宅なども澤
山建てます

この内容からも、旅館や別荘の建
設が急がれた様子が伺える。また、
周辺の道路整備や名鉄小牧線(当時
は名岐鉄道大曾根線)羽黒駅の開業
も、観光開発の後押しになっていた
のだろう。旅館や別荘といった宿泊

施設を全面的にPRすることで、
鉄道を利用して訪れる遠方からの観
光客を呼び込むようにする戦略が、当
時の観光パンフレットや絵葉書から
窺うことができる。

観光地として先を走る「日本ライ
ン」・犬山に追従するように、観光
ブームの波に乗り遅れまいと「日本
のゼネバ(注)」として観光開発が
急ピッチで進められた入鹿池。しか
し、その勢いも、犬山と同じく戦争
という荒波には抗えず後退を余儀な
くされ、人々の記憶から薄れてしま
うことになる。

3D データを用いた博物館教育の可能性

「2023年度青塚子ども教室「いつでもどこでも古墳はかせ!」活動報告」

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
MusaForum 3Dデジタル資料活用チーム
早川 絳布

1. はじめに

博物館施設では、教育普及も運営していく上で重要な活動の一つであり、NPO法人ニワ里ねつとは、青塚古墳ガイダンス施設にて夏休み子ども向けの企画展とイベントを毎年開催している。私は、昨年度の企画展の展示準備並びに青塚子ども教室の企画運営に携わり、小中学生を主な対象として犬山市内の古墳や遺物資料について学べる内容を考案した。

企画当時、私は名古屋大学大学院

人文学研究科に在籍する学生でもあった。大学では考古学研究室と情報学研究科、名古屋大学博物館がチームを組み、文化財と情報学を掛け合わせた研究開発と検証を行っており、その活動分野の一つが、文化財の3Dデータ鑑賞Webアプリであった。私は主にその分野に微力ながら関わらせて頂いた。

昨年度の青塚子ども教室では、その3Dデータ鑑賞ツールを活用

し、子ども達が楽しく文化財に触れる機会作りと、そのツールを学校の教育現場で活用できるのか、その可能性を検証した。

2. カルプティコンとは

「Culpticon (カルプティコン)」とは、名古屋大学で2021年より開発と試験運用を行っている博物館施設向け文化財3Dデータ鑑賞用Webアプリケーションである(写真1)。開発は、名古屋大学考古学研究室と名古屋大学大学院情報学研究科(安田・遠藤・浦田研究室)が共同で行い、名古屋大学博物館の協力を得て試験運用を実施している。井上・早川・梅村・堀・遠藤・浦田・安田・梶原(2023, 101頁)の論文ではカルプティコンについて



写真1 カルプティコンのトップページ



写真2 2023年度青塚子ども教室チラシ

次のように説明を行っている。

「カルプティコンは、博物館施設の展示品をはじめとする、様々な文化財3Dデータを、スマートフォン等で手軽に閲覧できるようにすることを目的として設計されている。そのため、文化財の鑑賞に特化した様々な機能を実装しており、ガラスケースごととは異なる展示資料の楽しみ方ができるようになっている。」

カルプティコンは、様々な博物館施設の文化財3Dデータを一つに集め、各々の施設のサイトからしか展示品を鑑賞することができないという場所の制約を取り払い、文化財への接点を増やすことで、実際に見たいと施設へ訪れるきっかけへと繋げる、即ち博物館施設と人々の中継地点としての役割を果たすことを目標としている。

3. 本活動の経緯と目的

前章の目標を掲げ開発を行っていたが、3Dデータの閲覧場所を設けただけでは、閲覧者は元々文化財に関心がある人々に殆ど限られ、博物館施設に訪れる機会が少なく文化

財に馴染みのない層には届かないことが予想される。また、サイトを訪れたとしても、3Dデータをぐるぐる回しただけでは、「回すことができても面白かった」で興味関心が止まってしまう、博物館施設を訪れる動機とはなりにくい。ここで課題となったのは、カルプティコンをどのように活用していくかという問題である。

以上の課題について解決方法を探るべく、MusaForum（注1）（名古屋大学博物館学生運営スタッフ団体）に所属する名古屋大学農学部2年（2023年3月当時）の柿沼恒熙氏を筆頭として、活動をサポートされている名古屋大学博物館特任助教の梅村綾子氏とともに3Dデジタル資料活用チームを2023年冬に立ち上げた。2023年3月にミーティングを行った際、着目したのは「教育現場での活用」であった。カルプティコンの特性として、場所の制約の撤廃以外に、決まった方向からしか見ることができないという視点の制約も無くしている点が挙げられる。歴史の教科書や資料集に載っている文化財の写真では、展示ケースと同様決

まった方向からしか見ることができないが、カルプティコンはあらゆる方向、距離から鑑賞が可能となっている。そのため、固定観念に囚われない新たな気づきを得るきっかけになり得るのではないかと、与えられた情報をただ見るだけでなく、能動的に鑑賞することで関心を持ってもらうことができるのではないかと考えた。更には、コロナ禍をきっかけとして、小中学校ではタブレットを用いたICT教育が始まっているが、実際現場では教員が積極的にタブレットを授業に活用できていない状況であるという（注2）。その改善策として、カルプティコンを学校の社会や歴史の授業に用いることは有用なのではないかという意見も挙げられた。

ミーティングで集まった意見をもとに、カルプティコンの教育現場における活用の可能性を見出すための第一歩として、2023年度名古屋大学オープンキャンパス（2023年8月7日、8日）と今回取り上げる青塚子ども教室の場でイベントを企画することが決定した。一人一人の自由な視点で資料を鑑賞できるという点を活かすため、

観察スケッチをイベントの主な内容とした。

4. 2023年度青塚子ども教室について

(1) 概要

NPO法人ニワリねつとでは、国史跡である青塚古墳により親しんでもらうために、青塚古墳史跡公園を活用したイベントを開催している。その一環として毎年開催している青塚子ども教室は、学校が休暇中である夏休みを利用して、子ども向けにより分かりやすく、楽しく学んでもらうワークショップである。

2023年度は、7月15日から青塚古墳ガイダンス施設「まぼらの館」の通路展示スペースでミニ企画展「今日から君も、古墳はかせ！」を開催し、犬山市内の古墳を中心に、古墳時代の歴史を紹介した。それに合わせ、2023年度青塚子ども教室のタイトルは「いつでもどこでも古墳はかせ！」とし（写真2）、ワークショップ内で扱う資料は青塚古墳に加え、企画展で展示されている資料から選出し企画展と対応させた。「3.本活動の目的」で述べた通り、主な内容はカルプティコンを用いた観察とスケッチだが、青

塚古墳ガイダンス施設の研修室で行うことを踏まえ、学芸員による解説も加えた。

本イベントは親子参加も可能とし、7月23日（日）、8月1日（火）、8月11日（金）の全三回90分をほぼ同一の内容で行った。参加者には、スマートフォンやパソコン、タブレットを持参していただき、運営側が用意したWiFiにそれぞれ接続した。ワークシートは年齢や反省会をもとにいくつか作成し、スケッチ欄のみ（お子様向け）、スケッチ欄＋質問三問（大人向け）、スケッチ欄＋気づいたこと（最終日に使用）を用意した（写真3）。

開催にあたり、主催のニワリねつとその他、本イベントの準備・運営は共催である名古屋大学博物館が担った。また、古墳と遺物資料の3Dデータの撮影と作成には、同じく共催である名古屋大学考古学研究室の梶原義実教授と博士研究員である井上隼多氏の協力を得た。古墳のドローン撮影については6月中旬に大縣神社と犬山市の許可を得て行った。遺物撮影も同時期に光化学式スキャナーを用いて行い、一部フォトグラメトリで作成した。



写真3 ワークシート

(2)当日の流れ
 最初にイントロタクシヨンとして、青塚古墳ガイドンス施設と名古屋大学博物館の説明、カルプティコンの紹介をスライドにて行った。

その後、カルプティコンを用いた観察とスケッチに移り、前半では参加者全員が青塚古墳の3D画像を鑑賞した。拡大縮小したり向きを変えたりしながら観察した後(写真4)、参加者各々が気に入った向き・距離で古墳をスケッチした。描き終わった後、会場にいるMusaforumのスタッフが参加者個々に、「好きなところは?」「気になること・聞いてみたいことは?」「青塚古墳はどのように使っています?」「誰が眠っていた?」「どうしてこの形なのか?」というような質問を投げかけ、観察とスケッチから感じたことを汲み取った。描き上げたスケッチはホワイトボード一面に貼って他の参加者とも共有し、各々の視点の違いを感じてもらった。全員のスケッチが出揃ったところで、NPO法人ニワ里ねつと副理事長の服部哲也氏がその日のワークシートや気になることをもとに解説を行った(写真5)。

後半は、犬山市内の古墳から出土した「鳥つまみの高坏」、「提瓶」、「平瓶」、「把手付平瓶」、「甕」の5点を用意し、同様に観察、スケッチを行った。その後の流れは古墳と同様であ

る。

(3)当日の様子

参加者は親子参加が多かった(写真6)。お子様の年齢は幅広く、学校でのパソコンやタブレットの使用経験の有無も様々であった。スマートフォン一台を複数人で共用しているグループもあった。

今回は、青塚古墳を真横から臨める研修室で行ったため、スマートフォンなどの小さな画面で観察した後、実物を窓越しに見て比較することができた。遺物資料も、企画展で展示されているものを用いたため、終了後に観覧されていく参加者の方が多数見られた。また、実際に資料をケースから出して直接観察してもらい、色やサイズや気になったところが3Dデータと実物でどう異なるのかを体感していただく回もあった(写真7)。

質問は対話をしながら行ったが、お子様の中には言葉にして答えるのが恥ずかしかったり、難しかったりして黙ってしまうケースもあった。スケッチでは、取り組むスピードに差があり、一つを細かく描き込む参加者もいれば、大まかに特徴を捉え、複数の資料のスケッチを行って

いた参加者も見られた。また、大人の方も積極的に参加してくださり、各々の感性や経験を活かしたユニークな視点で描かれている方が多かった。

青塚古墳は前方後円墳の形がはっきり分かる真上から撮った画像が人気であった。また、初日にスケッチを行った際には、鍵穴の形からか、教科書やメディアの写真の影響か、後円部を上、前方部を下に描く参加者が殆どであり、前方後円墳が多くの人々の中で決まった向きで認識されているということが分かった。

今回は、カルプティコンで新たな気づきや発見を体験してもらいたかったため、2回目以降はそれ以外の向きで古墳を描くよう説明をしたところ、横向きや、斜め上等から観察した古墳のスケッチも見られるようになった。

古墳の形は前述の通り鍵穴に例えている参加者が年齢問わず多かった。また、壺形埴輪にも関心が集まり、「好きなところ」に挙げたり、何故並んでいるのかと疑問を抱く参加者が多かった。形の由来については、理由を想像するのも難しいという回答も見られた。

遺物資料は満遍なく興味が分かれており、「好きなところ」に挙げる理由も形や名前の響きなど様々であった。「気になること」には、普段底が見えない分、遺物整理の過程で行う注記の文字が気になる方や、表面の凹凸（糊薬の部分）が何かという質問、また現在では馴染みのない形状のためか、形についての言及も多かった。「どのように使っていたか、君ならどう使うか」という質問に対しては、個性豊かで自由な回答が得られた。今回取り上げた5点はいずれも料理あるいは飲み物を入れていたと考えられているが、その他にも鉛筆立て（提瓶）、アイロン（把手付平瓶）、ゲーム・ままごと（鳥つまみの高坏）といった回答も得られた。



写真4 3D画像を動かしている様子



写真5 解説を行う服部氏



写真6 会場の様子



写真7 実物と比較

(4)アンケート・意見
イベントの最後には今後の活動に活かすためにアンケートを行った。ここでは、全3回分の子ども向けアンケート21件の集計結果（注3）を簡単にまとめる。
質問1「年齢を教えてください。」（図1・2）で、年齢と学年を尋ねたところ、特に回答が集中したのは、8歳の5人、9歳の6人、また学年の回答では小学校3年生の7人、小学校4年生の4人で、歴史を学び始める少し前の小学校中学年が最も多かった。また、質問2「性別を教えてください。」（図3）の結果の通り、性別に偏り無く参加していただいた。質問3「イベントに参加した感想を教えてください。」（表

1）という自由記述の問題では、楽しかったという感想を多くいただいた一方で、スケッチや操作が難しいという感想もあった。質問4「カルプティコンでもっと見てみたいモノは何ですか？」（複数回答可）①日本で昔使われていたモノ（ハニワ、お皿、刀など）②海外で昔使われていたモノ③生き物の標本や化石④絵や銅像など、美術館で見られる作品⑤その他」（図4）では、①から④まで全てに○をつけている参加者が5名で、最も票が集まった項目は「日本で昔使われていたモノ」であった。その他にワークショップ内の意見では、実物を見るまでは大きさが分からないため、スケールを付けて欲しいという意見が挙がった。また、機種によって動作の良し悪しに差が

あり、画像が回転しすぎないように固定してほしいという意見も見られた。

5.まとめ

カルプティコンは、勿論家でも使用できるツールだが、今回はガイダンス施設で行うことで、「カルプティコンを開いて資料を鑑賞する↓博物館施設に足を運び実物を鑑賞する↓より詳細な情報を得る」という流れを90分の中で体験していただいた。本イベントに参加して頂いた方々が、新たな気づきを得たり、文化財や博物館施設への関心を少しでも抱くことができれば幸いである。
青塚古墳ガイダンス施設では、本イベントをきっかけにカルプティコンのサイトへと繋げるQRコードの配置やピラの作成を行ってきた。また、カルプティコンを活用したイベントは、名古屋大学博物館が中心となっており、学内外で現在も引き続き行われている。

今回「楽しかった」という感想を子ども達から多くいただくことができたことは、教育現場での活用の可能性を検証する第一歩として、確かに自信をつけることができたと思

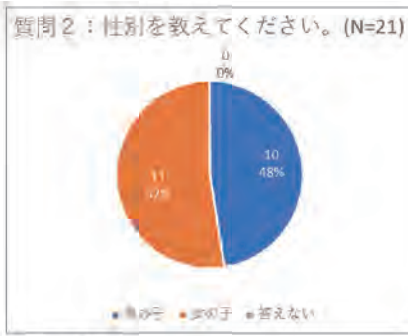


図3 質問2

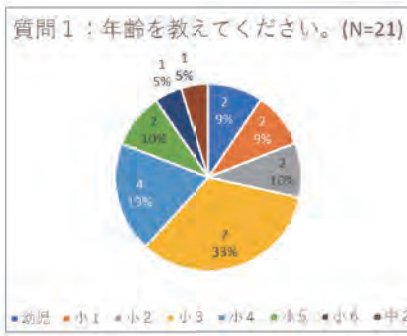


図2 質問1(学年)

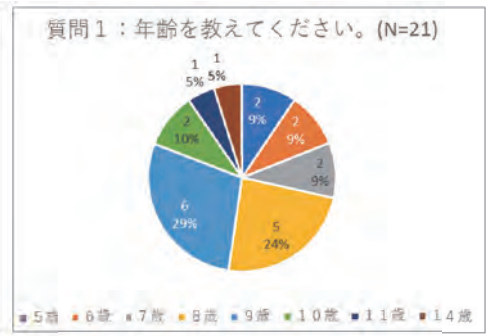


図1 質問1(年齢)

古墳のことがわかった。
昔のいろいろな陶器が見れて楽しかったです。
昔のことを聞いて楽しかった。!!
楽しかった ラッキーだった
古墳についてたくさん学べた。
たくさん知れてよかった
楽しかった
青塚古墳のことが知れて楽しかったです。
全部楽しかったです。
見れないところが見れてよかった
考えるところが楽しかった
楽しかった
楽しいです。面白かったと思いました。
楽しかった。
夏休みの宿題の勉強になった。
楽しかったいろいろなことが知れてよかったです。
難しかった
絵が難しい
面白い
パソコンが触れて楽しかったです。
パソコンが触れて嬉しかったです

表1 質問3

青塚子ども教室の運営にあたり、
本文で紹介した方々のほか、Mu
saForumのメンバー
である(2023年8月
当時)、山村悠太氏(名古
屋大学理学部1年生)、箱
崎凌大氏(名古屋大学理
学部2年生)、内山結介氏
(南山大学総合政策学部1
年生)、また一部撮影では
NPO法人ニワ里ねっこの
中野耕司氏にも多大なご協
力を賜りました。この場を

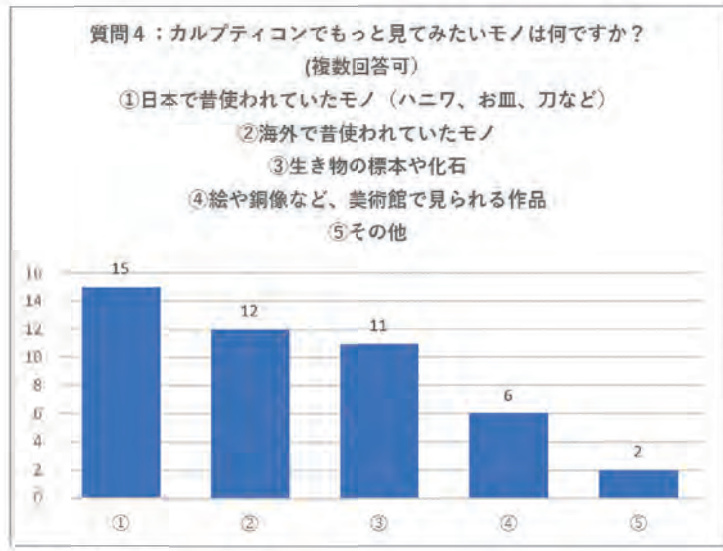


図4 質問4

謝辞

う。カルプティコンの改良と検証は
今後も継続していくが、より使いや
すい、使いたくなるツールへと変化
させていくためには、利用者の声も
重要である。是非、本文をお読みに
なった皆様には一度、体験してい
だき、率直な感想をお聞かせ願
いと思っています。また、青塚古墳ガ
イダンス施設には、本イベントで使
用したワークシートを置いてい
る(2024年3月時点)、もし来
館される機会があれば、大人の方も
お子様も是非一度取り組んでみて
いただきたい。

【参考文献】

- 1) 井上隼多・早川紘布・梅村綾子・堀原・遠藤守・浦田真由・安田孝美・梶原義美(2023)「子ども向けワークショップにおける3Dデータ活用の実践」Culpicon(カルプティコン)を用いた博物館施設における教育普及」『2023年度第14回 社会情報学会中部支部研究会第9回 芸術科学会中部支部研究会第12回 情報文化学会中部支部研究会合同研究会論文集』pp.101-104。
- 2) 妹尾昌俊(2021年9月7日)「学校教育のデジタル活用は道半ば 本日の課題は「教師のスキル不足」ではなし」Yahoo!ニュース <<https://news.yahoo.co.jp/expert/article/s/46f8a8e7f740785ab35dc30f5eb1bddd89f2927e>> (2024年4月6日閲覧)
- 3) アンケートの回答は研究などに活用させていただきますが、同意の可否について保護者の方に回答をお願いし、同意を得られた参加者の回答のみを集計に用いた。写真の使用についても説明の上、同意を得て掲載している。

【参照サイト】

- 1) Culpicon(カルプティコン) <<https://culpicon.jp/>> (2024年4月6日閲覧)



図5
カルプティコンの
サイトへはこちらから

お借りして御礼申し上げます。

■岐阜県歴史資料館	
▽資料群「堀一郎家文書」	
242.『五月十三日入鹿大堤防切洪水に付手紙』（堀一郎家文書B3の19-5/1枚） *差出人等不明。災害状況に関する噂など記す。	
■国立公文書館 *【コマ番号】の記載があるものは「国立公文書館デジタルアーカイブ」にて閲覧可	
▽資料群「内閣文庫」	
243.『愛知県史料』（府県史料愛知/23冊） 第6冊「旧名古屋県分御一新以来御達願伺届（慶応3-明治4年）」130丁表-同裏【132-133】 *尾崎将曹書状（5月22日）	
■東京大学史料編纂所 *【コマ番号】の記載があるものは史料編纂所HPの「所蔵史料目録データベース（Hi-CAT）」にて閲覧可	
244.『徳川家譜（尾張名古屋）』（4175-655/4冊/徳川義宣(差出)） 第4冊39丁表-40丁裏【0390-0401】 *尾崎将曹書状（5月）など	
245.『徳川義宣家記』（4175-1038/9冊/徳川義宣(差出)） 第2冊81丁裏-82丁表【0811-0820】、第5冊138丁表-同裏【1380-1381】 *尾崎将曹書状（5月22日）	
246.『成瀬正肥御動向留 自安政6年10月至明治元年12月』（維新史料引継本-IIほ-65/7冊） 第7冊44丁裏-45丁表、48丁表-49丁裏、55丁裏-56丁表【0441-0450, 0480-0491, 0551-0560】 *久保久治書状(5月17日)、被害の覚(6月)など。文献141参照。	
247.『小寺玉晁雑記（原題戊辰雑記集）』（維新史料引継本-IIほ-171/4冊） 第4冊121丁表-122丁裏【1210-1221】 *「戊辰秋町中流行歌」	
■徳川林政史研究所	
▽「史料群 旧名古屋税務監督局所蔵史料」 *愛知県公文書館にて影印本を閲覧可	
248.『入鹿河内屋堤再興一卷』（X70-075/4冊/尾州民政局） *文献235の底本の可能性あり。第2冊に私奉行が決壊当時の状況を報告する書状（5月17日）あり。	
249.『丹羽郡貢額帳』（X36-143/6冊）	
250.『貢額帳（春日井郡）』（X36-147/18冊）	*【文献249-252】幕末～明治初期の貢額（年貢の額）を村単位で記した帳簿。入鹿切れによって被災したとされる村では、明治元年の貢額が大きく落ち込んでいる。文献34に、文献249所載の貢額に基づくグラフあり。
251.『中島郡貢額帳』（X36-144/6冊）	
252.『海東郡貢額帳』（X36-141/5冊）	
▽「史料群 村絵図」 *愛知県図書館にてマイクロフィッシュを閲覧可	
253.『春日井郡井瀬木村入水潰地図面』（春日井郡13-3/1枚）〔地図〕 *文献174に収録	
254.『春日井郡江崎入鹿新田絵図』（春日井郡31-2/1枚/大野文五郎、長右衛門）〔地図〕	
255.『春日井郡大気村絵図』（春日井郡34-3/1枚/庄屋彦三郎、同太三郎）〔地図〕 *「入水図面」と題す	
256.『春日井郡熊之庄村絵図』（春日井郡91-1/1枚）〔地図〕 *「水入潰田畑図面」と題す。文献174に収録。 *【文献253-256】いずれも慶応4年5-6月の年月を記す。入鹿切れを含む同年5月水害による農地被害を記した絵図の可能性あり。	
▽「史料群 石河家文書」	
257.『入鹿沓大塘切候節之絵図』（3402-7/1枚）〔地図〕 *浸水域図。文献231, 233など所載の図と構図が同じ。	
▽「史料群 尾張国丹羽郡 下野原新田文書」	
258.『入鹿災害入用拾出帳』（205/1綴） *人名（寺院名含む）および米額を列記した帳簿（明治元年11月改）。全10丁。	
▽「史料群 尾張国丹羽郡羽黒村 吉野太一郎家文書」	
259.『募化簿』（丹羽郡史料51/1綴） *羽黒村に複数造立された慰霊地藏に関わる願書などの記録。図入り、全10丁。	

I. 古典籍・古文書・古絵図

所蔵・保管機関別。「書名」(請求番号/分量/編著者名)の順に記す。

■一宮市立中央図書館	
▽資料群「一宮市史資料」	
220. 『岩倉村記録 寛政-明治』(市8-35/1綴/岩田義一(写)) P.152-154, 233-240 * 岩倉町下市場(現・岩倉市)柴田氏所蔵資料からの転写本。文献36に一部記事の翻刻・要約文あり。	
221. 『入鹿切れ瀕死者明細記』(市11-4/1綴/森徳一郎(写)) * 『曳馬 第4号』(1931年); 文献33, 152に翻刻文あり。	
■小牧市中央図書館 * 【コマ番号】の記載があるものは「こまき電子図書館」にて閲覧可	
222. 『入鹿御池開発記 入鹿旧記 古木津新木津井高附 松永家旧記雑集 船橋家旧記抜書 合冊』(---/1綴/津田広助(写)) 「入鹿御池開発記」末尾, 「古木津新木津井高附」9丁裏【23, 45】 * 浸水域図など。文献129参照。	
223. 『御達申上候御事』(---/1綴) 【1-7】 * 常念寺(船津村)が寺社奉行所に宛てた書状(辰年5月)。翻刻文を付す。	
224. 『藤島村文書 [21]』(---/1枚/熊澤清三郎, 角左衛門) [地図] * 春日井郡藤島村の村絵図の断片(東半分)。慶応4年6月の年月を記す。入鹿切れを含む同年5月水害による農地被害を記した絵図の可能性あり。	
■愛知県公文書館	
▽資料群「県史収集資料」の内「旧県史資料」	
225. 『入鹿池奉献言書』(71-00021(1)/1綴/田口忠左衛門) * 美濃国付知村勸農世話役書状(慶応4年8-9月)	
226. 『入鹿御池代替人足井上下井組高之覚』(71-00021(2)/1綴) 8丁表-15丁表 * 羽黒村成海組庄屋太市郎書状(巳年3月)	
227. 『羽黒水災記』(71-00022/1綴/長谷川広泰) * 浸水域図あり。文献21, 135に冒頭部分の翻刻文、現代語訳などあり。	
228. 『犬山・小牧 御救米割渡牒』(71-00023/1綴) * 羽黒村朝日組関係	
229. 『慶応水災記 全』(71-00025/1綴/長谷川広泰) * 「羽黒水災記」、「新堤築立記」など	
▽資料群「大協家文書」	
230. 『乍恐御伺旁奉願上候御事』(W15-1-860/1綴) * 28ヶ村の庄屋が連名で代官へ宛てた書状(辰年8月)。文献34に要約文あり。	
■名古屋市鶴舞中央図書館 * 【コマ番号】の記載があるものは名古屋市図書館デジタルアーカイブ「なごやコレクション」にて閲覧可	
▽資料群「名古屋市史編纂資料」	
231. 『椋園時事録』(市8-105/44冊/山田千疇) 第35冊「慶辰雜記 二」74丁表, 86丁表-88丁裏【2177, 2189-2192】 * 加藤金次郎書状(5月16日)、鶴沼村大竹太郎左衛門書状(5月15日)、浸水域図 など	
232. 『玉晃見聞録』(市8-109/13冊/小寺玉晃) 第11冊73丁表-同裏, 第12冊39丁裏-40丁裏【1190-1191, 1248-1249】 * 「戊辰秋町中流行歌」、「入鹿池切レ聞取書」、第10-13冊は『戊辰雜記集』の抄本。	
233. 『葎の滴』見聞雜割』(市9-151/28冊/細野忠陳) 第21冊83丁表-86丁裏【1934-1938】 * 大竹太郎左衛門書状(5月15日)、太田陣屋御番之者書状(5月15日)、浸水域図 など。文献21, 152に翻刻・要約文あり。	
234. 『尾張名古屋 徳川家譜』(市12-50/4冊) 第4冊39丁表-40丁裏【462-464】 * 尾崎将曹書状(5月)等。文献141参照。	
235. 『入鹿河内屋堤再興一卷』(市13-22/1綴) * 慶応4~明治2年の入鹿池堤防再建に関する文書の集録(抄本)。88丁表-91丁表に執奉行が決壊当時の状況を報告する書状(5月17日)あり。文献132参照。	
236. 『(慶応戊辰)入鹿池決壊図』(市20-28/1枚) [地図] 【1】 * 浸水域図。文献26に翻刻図あり。	
■名古屋市蓬左文庫	
237. 『明治元年書翰集』(27-106/1綴) 枝番35「入鹿堤破壊の被害につき覚」、枝番36「入鹿堤切入の被害につき届書」 * 羽黒村・安楽寺村・神尾入鹿新田における被害の覚、生駒頼母書状(5月)	
238. 『雜記(文久至慶応)』(29-32/38冊) 第33冊12丁表-13丁裏 * 鶴沼村大竹太郎左衛門書状(5月15日)、浸水域図	
239. 『戊辰雜記集 付・糞廩屎』(25-8/8冊/小寺玉晃) 第6冊126丁表-127丁裏, 第7冊77丁裏, 78丁前の挿紙, 78丁表 * 「戊辰秋町中流行歌」、「入鹿池切レ聞取書」、浸水域図	
■名古屋市公文書館(名古屋市市政資料館内)	
▽資料群「新修名古屋市史資料」の内「名古屋市博物館所蔵 尾張藩治水関係資料」	
240. 『鶴沼村庄屋申上書控綴』(CNMU0-002 枝番15/1綴) 名古屋市博物館蔵第16冊P.24-26 * 鶴沼村大竹太郎左衛門書状(5月14日・15日)、浸水域図。文献25に書状の要約文および翻刻図あり。	
▽資料群「新修名古屋市史資料」の内「名古屋市博物館所蔵 石原家資料」	
241. 『日記』(CNMU0-036 枝番400/1綴) 名古屋市博物館蔵第227冊P.108-109	

187. 桜木弘光「山本屋又兵衛大福帳一稲葉騒動をめぐる一」『稲沢市史』（稲沢市 1968年）P.605-636の内610
188. 水谷盛光「翻刻『雑談記』（楓蔭文庫旧蔵）（三）」『郷土文化 第49巻第1号』（名古屋郷土文化会 1994年）P.65-85の内84-85
189. 近藤健一「下流地域における「入鹿切れ」供養塔・供養地蔵について」『研究紀要 瀬波 第7号』（古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 2020年）P.26-29 [ウェブ] NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワークHP
F. 書誌・目録 入鹿切れに関する文献について説明しているものや、関係するとみられるタイトルを含む文書目録
190. 『尾張徳川家明治維新内紛秘史考説一青松葉事件資料集成一』水谷盛光（左に同じ 1971年） P.95-96
191. 『犬山市史 資料目録』犬山市教育委員会、犬山市史編さん委員会（犬山市 1979年） P.40-41, 64, 69
192. 『岩倉市内各家所蔵文書目録 岩倉市文化財悉皆調査報告書別冊』岩倉市文化財悉皆調査委員会（岩倉市 1995年） P.21
193. 『船橋仁左衛門家（小牧市河内屋新田）文書目録 小牧市古文書目録シリーズ6』愛知文教大学地域連携センター小牧市古文書調査会（小牧市教育委員会文化振興課 2013年）はじめに、P.1, 3, 9, 12, 14, 30-31, 44, 58, 65, 69-70, 72
194. 『小牧市小牧原新田地内 落合家文書目録 他 小牧市古文書目録シリーズ7』愛知文教大学地域連携センター（小牧市教育委員会文化振興課 2015年） 「小牧市二重堀地内 神戸直彦家古書籍目録」218番
G. 報道 新聞・雑誌による報道記事（主要なもの）
195. 『犬山壮年会雑誌 第10輯』近藤敏治（犬山壮年会 1894年） P.76
196. 川口高風「『能仁新報』よりみた名古屋の仏教（一）—明治二十三年五月～明治二十三年十二月—」『愛知学院大学教養部紀要 第60巻第2号』（愛知学院大学教養教育研究会 2012年）P.53-110の内101 [ウェブ] 愛知学院大学機関リポジトリ
197. 無記名「百年前の惨事をしのび 入鹿池犠牲者の慰霊祭 犬山」『朝日新聞 1967年10月20日 朝刊 尾張版ほか』P.16
198. 無記名「各市町長ら二百人参列 入鹿池で決壊百年忌法要」『中日新聞 1967年10月20日 朝刊 近郊版・尾張版』P.8
199. 無記名「入鹿池の決壊まざまざ 古文書みつかると 絵図で濁流や被害 大災害への貴重な教訓」『朝日新聞 1974年10月6日 朝刊 名古屋本社版』P.12
200. 花井武人「入鹿切れ：150年忌法要 犬山」『毎日新聞 2018年4月12日 朝刊 地方版/愛知』P.21
201. 三田村泰和「『入鹿切れ』死者を悼む 犬山で法要、6月で150年」『中日新聞 2018年4月12日 朝刊 県内版』P.18
202. 三田村泰和「切れた堤 入鹿切れ150年（上）未明に濁流 死者1000人」『中日新聞 2018年6月27日 朝刊 近郊版』P.12
203. 三田村泰和「切れた堤 入鹿切れ150年（下）歴史風化させず教訓に」『中日新聞 2018年6月28日 朝刊 近郊版』P.12
204. 三田村泰和「入鹿切れ 教訓後世に 犬山のNPO 痕跡求め地面掘削」『中日新聞 2018年8月31日 朝刊 近郊総合』P.15
205. 三田村泰和「入鹿切れ 忘れないで 大口で企画展 浸水域や当時の声紹介」『中日新聞 2018年10月25日 朝刊 近郊版』P.18
206. 三田村泰和「入鹿切れ 語り継ごう 大口 記録朗読 決壊の地響き再現」『中日新聞 2018年12月9日 朝刊 近郊版』P.24
207. 伊藤隆平「入鹿池決壊なら6市2町で浸水 県が大災害時の想定地図」『中日新聞 2020年6月17日 朝刊 県内版』P.12
208. 角拓哉「水害「入鹿切れ」記憶を後世に 国内最大級 愛知・犬山のため池」『朝日新聞 2020年6月23日 朝刊 名古屋共通・地域総合』P.22
209. 梅田歳精「備える 3・11から 第187回 東日本大震災10年 伝え続ける/災とSeeing (2) 入鹿池（愛知県犬山市）ため池決壊 幕末の尾張北部のみ込む」『中日新聞 2021年5月3日 朝刊』P.21
H. 文芸 入鹿切れを題材とした、または言及している文芸作品
210. 『伊藤和四五郎伝』足立松陽（育生社 1938年） P.9-20
211. 『なぎの落葉—尾北俗談—』市橋鐸（左に同じ 1940年）〔謄写版〕 P.133-137
212. 『狼九五郎』長谷川伸（光の友社 1954年） P.292
213. 『尾張本宮山 山姥物語考』市橋鐸（兼松書店 1970年） P.92-97
214. 『曳馬草紙 尾北世間話』いちほしたく（左に同じ 1977年） P.20-28, 30-31
215. 『可児のむかし話』可児町民話の会（岐阜：可児町教育委員会 1980年） P.76-79
216. 『犬山のむかしばなし』犬山市秘書企画課（犬山市 1983年） P.40-43
217. 『続々 知多のむかし話』吉田弘（愛知県郷土資料刊行会 1989年） P.198-199
218. 『大口町のむかしばなし』大口町歴史民俗資料館（大口町教育委員会 2005年） P.73, 83
219. 『いるかいけがきれた』なごお たくま（羽黒小学校図書ボランティア「おはなしクルーズ」, 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 2021年）〔絵本〕 *巻末に入鹿切れの解説あり

149. 『目で見える春日井・小牧の100年』 龍積健 執筆（郷土出版社 1992年） P.39
150. 『続 尾北郷土資料写真集』 市橋鐸磨（愛知県小牧中学校郷土室 1932年） 枝番15
151. 『続々 尾北郷土資料写真集』 市橋鐸磨（愛知県小牧中学校郷土室 1933年） 枝番22, 23, 25
152. 『犬山こぼれ話』 市橋鐸磨（兼松書店 1967年） P.11, 70-78, 108-110, 214-218
153. 『犬山市史 史料編四 近世上』 犬山市教育委員会, 犬山市史編さん委員会（犬山市 1987年） P.299
154. 『犬山市史 史料編五 近世下』 犬山市教育委員会, 犬山市史編さん委員会（犬山市 1990年） P.619-621
155. 『犬山市史 史料編六 近代・現代』 犬山市教育委員会, 犬山市史編さん委員会（犬山市 1989年） 口絵, P.2, 54, 57, 183-185, 727, 765, 837, 886-888
156. 『明治維新と犬山—犬山藩の誕生』 犬山城白帝文庫歴史文化館（犬山城白帝文庫 2010年） P.27
157. 『小弓荘吉野家拾遺 吉野家先祖五百年諱記念』 吉野家先祖五百年諱発起人会（左に同じ 1969年） P.7-9, 45-51
158. 『入鹿沼池由来始末誌』 吉野積治（左に同じ 1984年頃）〔稿本〕
159. 『小牧山と小牧の歴史—尾張徳川家と江崎家—』 小牧市経済環境部商工課（左に同じ 1982年） P.13-14
160. 『江南市史 資料三 古文書編上』 江南市史編纂委員会（江南市 1980年） P.44, 444-445
161. 『江南市史 資料三 古文書編下』 江南市史編纂委員会（江南市 1980年） P.389
162. 『江南史料散歩 巻上』 滝喜義（左に同じ 1981年） P.56 *同タイトルの「復刻版」には当該記事なし
163. 『新編 一宮市史 資料編九』（一宮市 1969年） P.134, 441-442, 505, 520
164. 『新編 一宮市史 資料編十』（一宮市 1971年） P.657, 956-957
165. 『新編 一宮市史 資料編 補遺二』（一宮市 1980年） P.813
166. 『新編 一宮市史 資料編 補遺四』（一宮市 1983年） P.264
167. 『一宮市史 西成編』 一宮市教育委員会（左に同じ 1953年） P.600
168. 『一宮市今伊勢町史』 今伊勢町史編さん委員会（左に同じ 1971年） P.417
169. 『新修稲沢市史 資料編十一 近世 地方二』（新修稲沢市史編纂会事務局 1987年） P.176, 181
170. 『新修稲沢市史 資料編十六 近現代三』（新修稲沢市史編纂会事務局 1989年） P.629-630
171. 『小牧市史 資料編3（近世文書編1）』 小牧市史編集委員会（小牧市 1979年） 解説P.14, 本文P.566-569, 576-623, 626-640, 643, 650-651, 658 *入鹿切れとの関連が不明確な記事を含む
172. 『兼松家（岩崎村庄屋）文書目録・図録・全釈文 小牧市古文書目録シリーズ2』 愛知文教大学地域連携センター小牧市古文書調査会（小牧市教育委員会 2011年） 各文書釈文P.128
173. 『春日井市史』（春日井市 1963年） P.316-319
174. 『師勝近世村絵図』 師勝町近世村絵図編集委員会（師勝町役場総務部企画課 1986年） P.151, 154 *慶応4年5-6月の年月を記す村絵図2点の画像を掲載している。入鹿切れを含む同年5月水害による農地被害を記した絵図の可能性あり。
175. 『渡辺家文書に見る江戸後期の下小田井村 にしびの文化財第十集』 西枇杷島町文化財調査委員会（西枇杷島町教育委員会 2001年） P.12-13, 179-184
176. 『蟹江町史 本編』 蟹江町史編さん委員会（蟹江町 1973年） P.525
177. 『港区のおいたち聞き書 別冊 通巻7 水口屋文書—小川新田に関する資料—』（名古屋市港区 1964年） P.126-127
178. 『名古屋明治文学史（二）—中期の文学とその展開— 文化財叢書第76号』 名古屋近代文学史研究会（名古屋市教育委員会 1979年） P.2-3
179. 『幽冥界研究資料 第一巻』 友清歎真（天行居 1923年） P.200-201
180. 『川島町史 史料編』 川島町（岐阜：川島町 1981年） P.811
181. 『可児町史 史料編』 可児町（岐阜：可児町 1978年） P.975
182. 『御嵩町史 史料編』 御嵩町史編さん室（岐阜：御嵩町 1987年） P.928-929
183. 『恵那市史 史料編』 恵那市史編さん委員会（岐阜：恵那市 1976年） P.1265
184. 『湖西市史 資料編2』 湖西市史編さん委員会（静岡：湖西市 1981年） P.636
185. 『東浅井郡志 巻3』 黒田惟信（滋賀：東浅井郡教育会 1927年） P.644
186. 『藍田谷口先生全集 文下 巻2』 谷口鉄太郎（左に同じ 1925年） 61丁裏

D. 研究・論考 入鹿切れを主題としていない論文や、研究史に関わる文献も含む

117. 『尾張治水史 前編 附尾張水害史 土木研究資料第1輯』水谷鏞（土木研究資料編纂会 1931年） P.16-20, 50-51
118. 『創立拾周年記念誌（曳馬 第7号）』市橋鐸磨（愛知県小牧中学校同窓会 1934年） P.44-45
119. 『日本のため池 防災と環境保全』内田和子（海青社 2003年） P.117-138
120. 『日本の放水路』岩屋隆夫（東京大学出版会 2004年） P.213-214, 393
121. 『研究紀要XVI』大口町歴史民俗資料館（大口町教育委員会 2019年） P.1-50
122. 『大口町歴史民俗資料館年報21 平成30年度』大口町歴史民俗資料館（大口町教育委員会 2019年） P.3, 15-22
123. 林進「開発と自然環境保全—愛岐丘陵をめぐって—」『岐阜大学農学部研究報告 第34号』（岐阜大学農学部 1973年）P.113-123の内116
124. 中村好男「尾張平野北東部における農業水利の歴史的展開と農地及び農業用排水の地域的諸機能効果について（第1報）尾張平野の立地と歴史的展開及び入鹿用水の開削と用排水現況」『東京農業大学農学集報 第21巻第1号』（東京農業大学 1976年）P.1-13の内8-9
125. 湯川清光「古代のフィルダム—日本のフィルダム1700年のあゆみ（前編）—」『農業土木学会誌 第49巻第7号』（農業土木学会 1981年）P.25-30の内30 [ウェブ] J-STAGE
126. 内田和子「ため池の決壊による水害の事例分析（1）1868年における愛知県入鹿池の事例」『水利科学 42巻5号』（日本治山治水協会 1998年）P.50-66 *文献119に収録 [ウェブ] J-STAGE, AgriKnowledgeシステム
127. 内田和子「ため池の決壊による水害の事例分析（2）1868年における愛知県入鹿池の事例」『水利科学 42巻6号』（日本治山治水協会 1999年）P.54-69 *文献119に収録 [ウェブ] J-STAGE, AgriKnowledgeシステム
128. 高木史人「「やろか水」伝説後日譚—「やろか雨」噂から「入鹿切」噂に至るまでの輻輳を記録した市橋鐸とその生徒たち」『口承文芸研究 第30号』（日本口承文芸学会 2007年）P.126-135 [ウェブ] 日本口承文芸学会HP
129. 山田久「「象山文庫」（小牧市立図書館所蔵）の伝写資料について（その2）入鹿池関係資料とその活用」『中部図書館情報学会誌 Vol. 55』（中部図書館情報学会 2015年）P.31-40 [ウェブ] J-STAGE
130. 栗木英次「調査研究成果報告 入鹿池築造の歴史と“入鹿切れ”の災害」『中部「歴史地震」研究年報 第四号』（中部「歴史地震」研究懇談会 2016年）P.8-11, 発表資料(23頁分)
131. 水野皓司「慶応四年の『入鹿切れ』考」『かじわら 第28号』（梶原景時公顕彰会 2016年）P.15-17
132. 鈴木雅「慶応四年の入鹿池決壊」『名古屋と明治維新』（風媒社 2018年）P.248-271
133. 大塚友恵「「入鹿切れ」過去の災害から学ぶ」『かじわら 第31号』（梶原景時公顕彰会 2019年）P.20-21
134. 大塚英二「明治維新时期の地域金融講について—尾張西部地方の場合—」『愛知県立大学日本文化学部論集 第13号 大塚英二先生退職記念』（愛知県立大学日本文化学部 2022年）P.209-227の内216-217 [ウェブ] 愛知県立大学学術リポジトリ

E. 資料 明治45年以前の文書・金石文や、入鹿切れに関わる事物の写真など

135. 『入鹿切聞書』市橋鐸磨（愛知県小牧中学校校友会 1931年） *聞書き集あり [ウェブ] こまき電子図書館
136. 『入鹿池築堤と明治の大洪水 第2回小牧の古文書展～船橋仁左衛門家文書を中心に～』愛知文教大学地域連携センター小牧市古文書調査会, 小牧の古文書展実行委員会（小牧市 2012年）「船橋家文書について」, P.14-15
137. 『入鹿池築堤と明治の大洪水 第2回小牧の古文書展～船橋仁左衛門家文書を中心に～ 図録別冊—掲載史料の翻刻—』愛知文教大学地域連携センター小牧市古文書調査会, 小牧の古文書展実行委員会（小牧市 2012年） P.12-15
138. 『入鹿池の築造と「入鹿切れ供養地蔵」について』（舟橋昭治 2013年） P.1, 5-18, 21-23, 26
139. 『入鹿池切れから百五十年 入鹿池切れ百五十年忌大法要並びに無災害祈願』（入鹿用水土地改良区 2018年）
140. 『御触状留帳から見る入鹿池決壊と村の対応 船橋仁左衛門家文書翻刻』小牧の古文書を読む会（左に同じ 2018年）
141. 『復古記 第五冊』太政官（内外書籍 1929年） P.557-559, 571-572
142. 『愛知県史 資料編16 近世2 尾西・尾北』愛知県史編さん委員会（愛知県 2006年） P.283-285, 906
143. 『愛知県史 資料編17 近世3 尾東・知多』愛知県史編さん委員会（愛知県 2010年） P.586-588
144. 『愛知県史 資料編23 近世9 維新』愛知県史編さん委員会（愛知県 2016年） P.61, 670-671
145. 『名古屋叢書 第五巻 記録編（2）』名古屋市教育委員会（左に同じ 1962年） P.338
146. 『尾張藩財政と尾張藩社会』杉本精宏（清文堂出版 2011年） P.277
147. 『木津用水史 改組編』丹羽欽治（木津用水土地改良区事務所 1975年） P.1の前, 7-11, 25, 481の前, 482-483, 491, 541-542
148. 『尾北郷土資料写真集』市橋鐸磨（愛知県小牧中学校郷土室 1931年） 枝番44

78. 『小針入鹿新田字誌 昭和御大典記念』小針入鹿新田青年会（左に同じ 1929年）〔謄写版〕 P.6
79. 『豊山町史』豊山町史編集委員会（豊山町 1973年） P.88, 116-117
80. 『郷土文集 第3集』豊山町文化財研究会（左に同じ 1983年） P.9
81. 『師勝の民話』師勝町民話編集委員会（師勝町教育委員会 1980年） P.16
82. 『師勝の地名考』師勝町地名編集委員会（師勝町教育委員会 1981年） P.12, 20
83. 『師勝のまつり』師勝町まつり編集委員会（師勝町教育委員会 1982年） P.15
84. 『師勝の寺院』師勝町郷土史編集委員会（師勝町教育委員会 1991年） P.48
85. 『西春町史 民俗編2』西春町史編集委員会（西春町 1984年） P.793, 990, 1029, 1090, 1124-1125, 1156-1157, 1215 *間書き集あり
86. 『西春町史 資料編1 解説』西春町史編集委員会（西春町 1983年） P.44
87. 『春日村史』春日村史編さん委員会（春日村 1961年） P.151, 342
88. 『春日村史 現代編』春日村史編集委員会（春日村 1988年） P.239, 245-246, 328, 341, 350-351, 610-611, 616
89. 『春日村史 資料編』春日村史編集委員会（春日村 1988年） P.424, 426-427, 430, 432, 442 *文献88の「第7章 文化財」において紹介されている石造物の銘文および写真
90. 『新川町史 資料編1 自然・文化財・民俗』清須市新川町史編さん委員会（清須市 2006年） P.222, 241
91. 『新川町誌』町制五十周年記念町誌編纂委員会（新川町 1955年） P.702-703, 1211
92. 『西枇杷島町史』西枇杷島町史編纂委員会（西枇杷島町 1963年） P.157-159
93. 『甚目寺町史』甚目寺町史編纂委員会（甚目寺町 1975年） P.697
94. 『地蔵と信仰 甚目寺町文化財報告書Ⅲ』（甚目寺町教育委員会 1986年） P.70-71
95. 『大字の歴史と変化 甚目寺町文化財報告書Ⅶ』（甚目寺町教育委員会 1999年） P.12
96. 『尾張鎌倉街道 萱津昔語り』武藤尚武（ブイツーソリューション 2015年） P.16-17
97. 『七宝町史』七宝町郷土史研究委員会（七宝町 1966年） P.234, 353-354
98. 『美和町史』美和町史編さん委員会（美和町 1982年） P.301, 492
99. 『大治町民俗誌 上巻』名古屋民俗研究会（大治町 1979年） P.150
100. 『大治町民俗誌 下巻』名古屋民俗研究会（大治町 1979年） P.660
101. 『新修名古屋市史 資料編 民俗』新修名古屋市史資料編編集委員会（名古屋市 2009年） P.300-301
102. 『枇杷島町史』松本百三郎（左に同じ 1955年） P.133
103. 『名古屋市楠町誌』名古屋市楠町誌編纂委員会（名古屋市楠町誌刊行会 1957年） P.554-555
104. 『知多半島の漁撈文化—伝統漁法と習俗— 知多市文化財資料第21集』知多市教育委員会（左に同じ 1985年） P.72
105. 『写真集 明治大正昭和 知多 ふるさとの思い出313』知多市古文化研究会（国書刊行会 1985年） P.70
106. 『尾張藩所付代官人名辞典』澤柳倫太郎（風媒社 2019年） P.72-74
107. 『名古屋市史 人物編二』名古屋市（川瀬書店 1934年） P.602
108. 『金宝歴代録』辻東山, 金宝山瑞龍寺（金宝山瑞龍寺 1941年） 瑞龍禪堂師家僧伝7丁表（妙心五百十五世薩門宗温禪師の項）
109. 『定本柳田国男集 第4巻』柳田国男（筑摩書房 1963年） P.301
110. 鈴木鐸「やろか水伝説」『郷土研究 第4巻第9号』（郷土研究社 1916年） P.557-558
111. 今井正治「尾北巷談」『曳馬 第5号』（愛知県小牧中学校校友会 1931年） P.56-60の内59
112. 今井文男「入鹿切災害記事拾遺」『曳馬 第6号』（愛知県小牧中学校校友会 1932年） P.32-34の内32-33
113. 石川準吉「大水害来りなば」『文藝春秋 第38巻10号（1960年10月号）』（文藝春秋新社） P.112-117の内112-113
114. 鶴飼留男「入鹿池決潰水災記」『愛知農林統計No.174（1966年6月号）』（愛知農林統計協会） P.13-14
115. 小出栄「明治元年の入鹿切れ 郷土の歴史と伝説余話（2）」『郷土文芸誌 駒来 第452号』（小牧市文芸協会 2009年） P.9-11
116. 服部恒弥「本堂前の巨岩に思う」『かじわら 第22号』（梶原景時公顕彰会 2010年） P.18

38. 『小牧町史』津田応助（小牧町史編集会，小牧町教育会 1926年） P.9-12, 327, 372, 375-376
39. 『師勝町史』師勝町史編さん委員会（師勝町 1961年） P.325 * 「増補版」（1981年）においてはP.332-333
40. 『西春町史 通史編1』西春町史編集委員会（西春町 1983年） P.275-277, 600 * 『西春村史』（1959年）に同文あり
41. 『清洲町史』清洲町史編さん委員会（清洲町 1969年） P.380-381
42. 『新川町史 通史編』清須市新川町史編さん委員会（清須市 2008年） P.265-266, 309-310
43. 古賀邦雄「ダムの書誌あれこれ（166）木曾川水系 入鹿池の変遷史」『ダム日本=The dam digest 891号』（日本ダム協会 2019年） P.81-95の内86-87

C. 地域・人物など各説 入鹿切れに関わる各地域の状況・人物などについて、資料を掲げず説明しているもの

44. 『東春日井郡誌』東春日井郡（左に同じ 1923年） P.886, 1207, 1224-1225, 1373
45. 『東春日井郡農会史』愛知県東春日井郡農会（左に同じ 1929年） P.126, 134, 235, 1369, 1462-1463, 1489
46. 『愛知県西春日井郡誌』愛知県西春日井郡（左に同じ 1923年） P.44
47. 『郷瀬川悪水普通水利組合沿革誌』郷瀬川悪水普通水利組合（左に同じ 1944年） 序, P.18, 34-35, 396-397
48. 『犬山市資料 第一集』犬山市教育委員会，犬山市史編さん委員会（犬山市 1981年） P.129
49. 『犬山羽黒今昔物語』津守道夫（羽黒地区コミュニティ推進協議会 2014年） P.56, 61-64, 91-93
50. 『民話の郷を訪ねて』津守道夫 ほか（羽黒地区コミュニティ推進協議会 2016年） P.23, 25, 51, 83, 106
51. 『御用留 其の十六 貢租・三役銀などの事並びに訴訟に関する事 付 話題提供記録（犬山市・郷土城東の歴史を知る会）』齊木五左衛門，奥村重臣，齊木昌二（御用留学習会 2014年） P.40
52. 『知新 開校百年記念誌』犬山市立羽黒小学校（左に同じ 1973年） P.26-27, 40, 44
53. 『入鹿史（新版）』宮島千守（左に同じ 1993年）〔稿本〕 本文P.47, 87-88, 89付箋
54. 『伊勢湾台風物語』寺沢鎮（報道春秋社 1960年） P.22-23
55. 『五十年の歩み』（大口村 1956年） P.4, 61-63 * 聞き書き集あり
56. 『大口村誌』野田正昇（大口村 1935年） 口絵, P.5, 151-152, 527, 615-617, 620 [ウェブ] 大口町HP
57. 『妙智寺 地域社会との関わり方の歴史』妙智寺歴史編集委員会（河北上郷区，社寺総代 2022年） P.11
58. 『二ツ屋小史』水野錦二（左に同じ 1984年） P.59
59. 『隨筆 尾張郷土文化医科学史攷』吉川芳秋（尾張郷土文化医科学史攷刊行会 1955年） P.665-667
60. 『尾北巷談』市橋鐸磨（愛知県小牧中学校校友会 1936年） P.22
61. 『扶桑町史上』扶桑町教育委員会，扶桑町史編集委員会（扶桑町 1998年） P.64-67
62. 『扶桑町史』扶桑町（左に同じ 1976年） P.24-26, 438, 628-630
63. 『斉藤今昔ひろいがき』大藪美貴江（愛知県郷土資料刊行会 1984年） P.180-181
64. 『町史布袋町大観』村瀬鼎五郎（町史布袋町大観発行所 1934年） P.11, 20-21
65. 『新編 一宮市史 本文編上』一宮市（左に同じ 1977年） P.1061
66. 『一宮市史上巻』（一宮市 1939年） P.130-131
67. 『千秋村史』千秋村史編集委員会（左に同じ 1956年） P.5-7, 203 * 聞き書き集あり
68. 『町屋、村物語 八幡社復興記念』長谷川輝（左に同じ 1985年） P.68, 111
69. 『お地蔵さん見つけた 愛知県内80ヵ所』中日新聞社会部（中日新聞社 2001年） P.68
70. 『新修稲沢市史 本文編 下』（新修稲沢市史編集会事務局 1991年） P.123
71. 『新修稲沢市史 資料編四 地誌上』（新修稲沢市史編集会事務局 1982年） P.329-330, 361-362
72. 『北里村誌』北里村三十周年記念会（左に同じ 1936年） P.9, 11-12
73. 『こまき昔話 小牧叢書1』小牧市教育委員会（左に同じ 1972年） P.23, 33-34
74. 『小牧の石碑 小牧叢書13』小牧市文化財資料研究委員会（小牧市教育委員会 1992年） P.11-12, 49-51
75. 『小牧の神社』小牧市文化財資料研究委員会（小牧市教育委員会 2011年） P.20, 22
76. 『三ツ湖学区のむかし話』小牧市立三ツ湖小学校（左に同じ 1992年） P.88-89, 111, 125
77. 『北里教育百年の歩み』小牧市立北里中学校（左に同じ 1973年） P.34-35

A. 概要を簡潔に説明しているもの 資料（明治45年以前の文書・金石文）を掲げず、入鹿切れについて説明しているもの

1. 『入鹿池の堤防が切れた！ 小牧市立としゃかん 子ども郷土しりょう その26』小牧市立図書館（左に同じ 2015年）〔一枚刷り〕
2. 『愛知県史 通史編5 近世2』愛知県史編さん委員会（愛知県 2019年） P.465, 675
3. 『愛知県史 通史編6 近代1』愛知県史編さん委員会（愛知県 2017年） P.696-697, 707
4. 『まんが大口町の歴史 近・現代編』大口町歴史民俗資料館（大口町教育委員会 2006年）〔漫画〕 口絵, P.21-23
5. 『新修名古屋市史 第四巻』新修名古屋市史編集委員会（名古屋市 1999年） P.469
6. 『新修名古屋市史 第八巻 自然編』新修名古屋市史編集委員会（名古屋市 1997年） P.280-281
7. 『愛知県災害誌』名古屋地方気象台 監修（愛知県 1970年） P.112-113
8. 『郷土読本 犬山』犬山市教育委員会（左に同じ 1962年） P.80, 162-163
9. 『郷土研究室 東海今と昔』名古屋中央放送局（「郷土研究室」刊行会 1959年） P.212-214
10. 『水害地域に関する調査研究 第1部 資源調査会資料第46号』総理府資源調査会土地部会水害小委員会水害地域分科会（総理府資源調査会事務局 1956年） P.74
11. 『愛知県史 第三巻』愛知県（左に同じ 1939年） P.420-421
12. 『天明年間に於ける新川開鑿と水野千之右衛門』高木哲之助（左に同じ 1937年） P.5-7
13. 『治水及填築（明治以後）』内務省土木局（左に同じ 1923年） P.49-51
14. 『名古屋市史 政治編第二』名古屋市役所（左に同じ 1915年） P.223-224
15. 『愛知県史 上巻』愛知県（左に同じ 1914年） 第3編P.1, 18, 第5編P.53
16. 『帝国地名辞典 上巻』太田為三郎（三省堂書店 1912年） P.176
17. 『入鹿溜池米歴 明治四十四年四月一日調』入鹿用水普通水利組合（左に同じ 1911年） P.3
18. 『愛知県丹羽郡誌』山田米三郎（文会堂 1895年） 12丁表
19. 『大日本府県志 卷之10-14』河井庫太郎（秩山書房 1891年） 卷之十一上編P.53
20. 『愛知県丹羽葉栗郡地誌』岡野直方, 伊賀乗勢（鈴木書屋 1882年） 4丁裏-5丁表

B. 資料を用いて説明しているもの 資料を論拠または参考として掲げ、入鹿切れについて説明しているもの

21. 『入鹿池史』入鹿池史編纂委員会（入鹿用水土地改良区 1994年） 見返し表, 口絵, 発刊のことば, P.268, 343-506, 589, 1190-1196, 1217, 1219-1234, 1239, 1246-1258, 1340-1357, おわりに *聞き書き集あり
22. 『特別展 治水・震災・伊勢湾台風』名古屋市博物館（左に同じ 2019年） P.46, 49-50, 140
23. 『秋の企画展 地域の災害を知る 入鹿切れ シンポジウム 入鹿切れを考える～洪水堆積層の調査から～』大口町歴史民俗資料館（左に同じ 2018年） *文献121に収録
24. 『入鹿切れから150年、地域の災害を忘れない！ 平成30年6月16日（土）犬山市総合防災訓練資料』古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク（左に同じ 2018年）〔一枚刷り〕
25. 『江戸時代 人づくり風土記23 ふるさとの人と知恵 愛知』石川松太郎 ほか（農山漁村文化協会 1995年） P.36-38
26. 『尾張の水とくらし』愛知県社会科教育研究会尾張部会（愛知県社会科教育研究会 1980年） P.73, 204-205
27. 『木津用水史』木津用水普通水利組合（左に同じ 1928年） P.429, 432-434, 526, 656-660
28. 『愛知県丹羽郡誌』丹羽郡教育会（左に同じ 1917年） P.35-41
29. 『犬山市史 史料編二 自然』犬山市教育委員会, 犬山市史編さん委員会（犬山市 1982年） 序, P.460-463
30. 『犬山市史 通史編下 近代・現代』犬山市教育委員会, 犬山市史編さん委員会（犬山市 1995年） P.173, 185-188, 387
31. 『犬山市資料 第三集』犬山市教育委員会, 犬山市史編さん委員会（犬山市 1987年） 口絵, P.268-269
32. 『尾張 興禅寺史』横山住雄（妙国山興禅寺 2007年） P.63-64, 66, 77, 105-121
33. 『大口町史』大口町史編纂委員会（大口町 1982年） P.40-44, 174, 266, 277-283, 715, 831-832, 951〔ウェブ〕大口町HP
34. 『江南市史 本文編』江南市教育委員会, 江南市史編さん委員会（江南市 2001年） P.446, 466, 479-482
35. 『江南市史 資料五 近現代編』江南市史編纂委員会（江南市 1988年） P.19-20
36. 『岩倉市史 中巻』岩倉市史編集委員会（岩倉市 1985年） P.4, 89-102, 124, 372 *聞き書き集あり。聞き書き等について『岩倉町史』（1955年）に同文あり。
37. 『小牧市史 本文編』小牧市史編集委員会（小牧市 1977年） P.166, 168, 205, 224, 226

入鹿切れ文献目録

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
近藤 健一

はじめに

「入鹿切れ」とは、慶応4年（明治元年・1868年）5月、梅雨の長雨によって増水していた愛知県犬山市の農業用ため池「入鹿池」の堤防が決壊し、濁流に襲われた尾張北中部地域において死者およそ1,000名、流失家屋およそ800戸などの甚大な被害が生じた災害のことを指します。凄惨を極めた災害は地域社会に大きな爪あとを残し、現在にいたる150年余りの間さまざまに語り継がれ、また記述されてきました。编者自身も、先祖の被災体験を断片的にはありますが伝え聞いています。

今回、数年前から取り組んできた文献調査の成果に基づき、この入鹿切れに関わる記述をまとめた目録を制作しました。公開されている文献に限定した調査であり、また编者の知識不足のため成果は十分とは言いがたいですが、災害の研究に少しでも役立てていただければ、また当時の人々の思いに触れていただければ幸いです。

目録の形式については『濃尾地震文献目録』『小牧市記事索引』等を参考にしました。

最後に、入鹿切れで犠牲となった方々に対し、あらためて哀悼の意を表します。

凡例

- 本目録には、以下の条件を満たす文献を掲載する。
 - ・内容：入鹿切れに関連する記述のある文献。入鹿池堤防の再建（主として廃藩置県以前）や、後世の人々による入鹿切れに関わる言動などの記述も含む。
 - ・形式：1. 刊行物
2. 稿本のうち、図書館・文書館などの施設やウェブ上において、特段の資格を持たずに閲覧可能なもの
- 目録はおおむね以下の形式で記す。
 - ・書籍等：『書名』編著者名（発行者名 発行年） 入鹿切れに言及しているページ範囲
 - ・雑誌記事等：編著者名「記事名」『掲載誌名』（発行者名 発行年） 記事のページ範囲 の内 入鹿切れに言及しているページ範囲
- 文献は、その形式や入鹿切れに関わる記述の内容に応じてA～Iの9種に分類している。1つの文献に多様な内容が含まれることも少なくないため、あくまで大まかな分類である。
- ウェブ上で閲覧可能な文献については、〔ウェブ〕のあとにサイト名を記す。（2024年3月20日閲覧）本目録に掲載したサイトのほか、「国会図書館デジタルコレクション」において多くの文献の閲覧が可能である。
- 文献の閲覧が可能なウェブサイトや施設に関わる情報は年々古くなっていくことが見込まれるが、研究の利便のため掲載することとする。文献の利用にあたっては、各サイト・施設の規定を遵守していただきたい。
- 本目録では災害にまつわる情報を発信する関係上、あまりに正確性に欠けると编者が判断した情報は掲載していない。ただし掲載した文献の史料価値や内容の正確性について、编者が確信を持っているわけではないことをおことわりしておく。利用は各自の責任において行っていただきたい。

私たちと一緒に
文化遺産を活かした
まちづくり活動に
参加してみませんか？



【ニワ里ねっと会員募集】

ニワ里ねっとの活動にご参加いただける方、ご支援していただける方を広く募集しています。

〈賛助会員 又は 正会員〉

個人・団体：1口 3,000円から

- ・賛助会員は事業企画への寄付を前提（総会議決権を放棄）。会報の送付を含めて、他は正会員と同じです。
- ・正会員は「総会」への出席をお願いいたします。

〈入会の流れ〉

- 1) 青塚古墳ガイダンス施設の窓口で受付
申込書に必要事項をご記入いただき、年会費を添えてお申し込みください。
- 2) お振込（郵便振替口座）による受付
新規会員様は通信欄に「新規賛助会員費」又は「新規会員費」、住所・氏名等を必ずご明記ください。
手数料は各自ご負担をお願いいたします。振込確認後、ご住所に会員証などを送付いたします。

【郵便振替口座】

口座番号 00850-9-198552
口座名称（漢字） 特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称（カナ） トクヒ コダイニワノサト プンカイサンネットワーク

上記口座にて、寄付金も受付けております。
ニワ里ねっとの活動へのご支援をお願い申し上げます。

〈ご案内〉

- ・会員期間は5月の総会から次の総会日までの一年間
- ・口座振込確認後、ご住所に「会員カード」等を送付させていただきます。
- ・「会報 さとの四季だより」年6回程度の配布当法人が実施する事業などの情報をご案内します。
- ・会員カード裏面「参加印」をためると、オリジナルグッズをプレゼント



イラスト（山本彩乃）



木之下城伝承館・堀部邸



青塚古墳史跡公園



歴史の里しだみ古墳群

NPO 法人

にわ
古代瀬波の里・

文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸
(NPO 事務所)

〒 484-0084

犬山市大字犬山字南古券 272

TEL:0568-90-3744

FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園
ガイドンス施設

〒 484-0945

犬山市字青塚 22-3

TEL:0568-68-2272

〈ニワ里ねっと HP〉▶
<http://niwasato.net/home>



〈木之下城伝承館・堀部邸 HP〉
<http://horibetei.com>

〈FB〉 <https://www.facebook.com/niwasatonet/>

〈twitter〉 <https://twitter.com/niwasatonet>

研究紀要 第11号

niwa
瀬波 愛

《編集・発行》

NPO 法人

古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》

令和6年5月18日



2024
第11号